

古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (14) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (14) : Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886～1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (12) (都留文科大学研究紀要第89集、2019年3月) に直接連続する。具体的には、『パイデア』 第三卷 (第4編 The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato プラトンの時代における教養理念の論争) の「2 The Rhetoric of Isocrates and Its Cultural Ideal イソクラテースの弁論術とその教養理念」(その3)、および「3 Political Culture and the Panhellenic Ideal 政治的教養と汎ギリシア主義の理想」を対象とし、その訳出と検討を行なう。

2. 小論の構成について

小論Ⅱ. では、『パイデア』第三卷 (第4編 The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato プラトンの時代における教養理念の論争) の「2 The Rhetoric of Isocrates and Its Cultural Ideal イソクラテースの弁論術とその教養理念」の後半部 (66p～70p) の訳出と<注記と考察>で構成し、Ⅲ. では「3 Political Culture and the Panhellenic Ideal 政治的教養と汎ギリシア主義の理想」の前半部 (71p～77p) の訳出と<注記と考察>で構成する。

なお訳文の項の区切りは、ドイツ語版にはない、英訳版で設定された1行空けの区切りを使っている (英訳版における区切りは、ハイエットとイェーガーとが協議して設定したものと推量される)。その項の見出しは私が便宜的に付したものである。また小論での末尾に「NOTES」(「ANMERKUNGEN」) を《原文注記》として配し、続いてそれに対する<注記と考察>を記す。

また小論の末尾に、Ⅳ. 「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察

ノート⑧～継続研究 (14) における～」を置く。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第Ⅱ巻 (1944年版) を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷にまとめられた復刻版 (1989年、初版は1973年) を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し (格変化などは、構文の類推可能性のことを考え、原文中のまま扱っている)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって推量できるので、訳出しないでおいた箇所がある。イエーガーが原文注記で指示する参考文献名等の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

なお、＜注記と考察＞などでギリシア古典からの訳文を引用する際に、そのなかの訳語を確認するためにギリシア語、英語を挿入する場合がある。それらは、とくに注記しない場合は、すべてローブクラシカルライブラリーに拠っている。

ハ) 訳文中の一項目が複数段落になっている場合は、段落ごとに説明の小見出しを『』という記号で付ける (この小見出しの設定は読者からの指摘に示唆を得た)。項の区切り自体は英訳版で設定されたものであり、また段落の位置も、ドイツ語版と英訳版とではしばしば異なる。つまり、項の見出しも段落ごとの小見出しも、英訳版の区切りに基づき、私が便宜的に付したものである。

その他のカッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) ＜注記と考察＞における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究 (5) と同様である。

4. 本継続研究における訂正と補筆

[訂正について] (その4)

イ) 本継続研究 (11) のⅢ. 5. の＜訳文＞ (論文ページ174の上から14行目) に誤記がある。

(誤) 「イソクラテース学校の創設は」→ (正) 「イソクラテースの学校の創設は」

ロ) 本継続研究 (12) の＜原文注記＞40. (論文ページ227の下から5行目) に誤記がある。

(誤) 「„Einzeltugenden : 個々の得“」→ (正) 「„Einzeltugenden : 個々の徳“」

ハ) 本継続研究 (12) の【資料-10】の書名 (論文ページ250) に誤記がある。

(誤) 「勝田守一『能力と発達学習——教育学入門Ⅰ』」

→ (正) 「勝田守一『能力と発達と学習——教育学入門Ⅰ』」

[補筆について] (その4)

イ) 本継続研究 (11) のⅢ. 2. の＜訳文＞ (論文ページ164の下から8行目) の語句に、下記のような補筆をする。

「ゴルギアースの *Olympicus* に酷似している」

→ 「ゴルギアースの *Olympicus* (『オリュンピア演説』) に酷似している」

ロ)「本継続研究(1)」とする「教育学と教養理念の起源に関する研究——W. イェーガーの『パイデア』から学ぶ——」(『都留文科大学大学院紀要第15集』2011年3月)のI. 9. の末尾に、改行して次の文章を補筆として挿入する。

なお、『哲学事典』(平凡社、1971年)には次のような「イェーガー」の項目があるが、そこでは『パイデア』は触れられていない。

イェーガー Werner Jaeger 1888-1961 ドイツの古典文献学者。キール大学教授をへて1936年アメリカに行きシカゴ大学教授。アリストテレス研究者として有名。

[主 著] *Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles*, 1912, *Humanismus und Jugendbildung*, 1921, *Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, 1923.

ハ) 本継続研究(9)のⅢ. β. の<注記と考察>(3)の文章末尾(論文ページ353)に、次の一文を補筆する。

なお加藤は、2008年8月にカトリックの洗礼を受けている(鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018年10月、の「加藤周一略年譜」に拠る)。

Ⅱ. 2 イソクラテースの弁論術 (THE RHETORIC, DIE RHETORIK) とその教養理念 (CULTURAL IDEAL, BILDUNGSIDEAL) (その3)

英訳版第Ⅲ巻、第4篇: 46p~70p

10. イソクラテースはプラトーンの理論の政治的本質を見逃していたが評価を変える <訳文>66p~67p

イソクラテースの、プラトーンのパイデアラーについての考えに関し際立つことは、彼の演説『ソフィストたちを駁す』で明らかにされているように、彼が、彼の敵対者の理論の政治的内容をまったく見逃しているということである。プラトーンの初期の対話篇から、彼 [=イソクラテース] は、ほんの少し前まで、大部分の現代の読者に与えたのとまったく同様の印象——つまりそれらの著者のたった一つの関心は、倫理的な改革 (moral reformation, sittliche Unterweisung 倫理的な教え)、なぜか奇妙なことに弁証法的理論 (dialectic reasoning, der Dialektik 弁証法) と結びついた理想 (an ideal)、であったという印象——をもったのに違いない。(それに対し: dagegen) 弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) の卓越性は、イソクラテースが考えるように、それがまったく政治的教養 (political culture, politische Bildung) だということである。それが国家における精神的な指導性を獲得するためにしなければならないことは、人生 (life) とその諸問題への新しい接近法 (approach, Weg) を見出すことのみである。古いタイプの弁論術は、それが道具として、日々の政治に打ち勝つかわりに、それに仕えることに甘んじていたので、多くの重要な好機を失っていた。このことからわれわれは、イソクラテースが、彼の国民の

政治的生活 (the political life of his nation, das politische Leben der Nation) に高い倫理的信条 (a higher moral creed, einem höheren Ethos 高い倫理感) を呼び起こさせ得ると信じていた、ということを理解することができる。不幸にも今日、ソフィストについての演説の、疑いもなく彼の新しい理想 (new ideal) を説明した主要な節を欠いた、たった一つの断片⁽¹⁾しか残っていない。イソクラテースは、彼がプラトンの哲学の政治的見地 (the political aspect, der politische Anspruch 政治的主張) を (明瞭に: klar) 理解するや否や、プラトンの教養の目的 (cultural plans, Bildungsziel 教養の目的) に対する態度を変えたに違いない。実際には、彼はすでに、プラトンの『ゴルギアース』によって、ソクラテースが彼の時代の唯一の真の政治家である、と知らされていたのであって、なぜなら彼 [= ソクラテース] は一人で彼の同市民 (his fellow-citizens, die Bürger) をよりよくしようと努力していたからである。^{<80>}そのことが純然たるパラドックスと解されることはもっともなことである——とりわけイソクラテースによって、つまり彼は、すべての同時代の著述家たちを駆り立てている動機 (the moving impulse, das Hauptmotiv) は、あらゆる主題についてこれまで聞いたことのないほどの逆説を見つけ出しながら何としても独創性を求めて努力することであると思っていたのであり、また自分がその課題でプラトンや他の哲学者たちと張り合えないということを (当然にも) 恐れていたのである。しかしのちに彼は『ピリッポスに与う』において、プラトンのライフワークを彼の死後のちょっと後に再吟味し、彼を、彼の理論は不幸にも実践に移されることはなかったのであるが、極めて偉大な政治的理論家 (political theorist, Staatstheoretiker) と見なしているのである。^{<81>}かれはいつ初めて、プラトンの人物と哲学 (character and philosophy) についての自分の見解を変えたのだろうか？

<注記と考察>

(1) ここで言われている「たった一つの断片」とは、中断され、残りが現存しない『ソフィストたちを駁す』(小池澄夫訳『イソクラテース 弁論集2』京都大学学術出版会、2002年、所収) のことであろう。

11. イソクラテースは『ヘレネー頌』においてプラトンの教養理念が政治的含みをもっていることを認めている

<訳文>67p~69p

『イソクラテースはソクラテースを単なる争論家たちとは区別している』われわれは答えを、彼の『ヘレネー頌』⁽¹⁾に見出すことができる。『ヘレネー頌』は、神話の人物に向けて語られる、模範的な賞賛の演説 (a model encomium, das Muster eines Enkomions 賞賛の演説の模範) であり、彼女 [= 神話の人物] は一般的には悪口が言われていたのであるが彼女を逆説的に賞賛している。その執筆の厳密な年代は不明であるが、しかしそれは明らかに、弁論『ソフィストたちを駁す』のすぐあとに書かれたのである——すなわち、イソクラテースの学校がまだ新しいうちに、である。その年代に対する下の方の限界は、イソクラテースが、終わり近くで彼のヒロイン (heroine, Heldin) への賞賛 (the praise, Lob) に与えている奇妙な形式 (by the singular form) によって、確定される: 彼は言う、彼女の誘拐に起因するトロイアに対する戦争で、ギリシア人たちの間に挙国一致 (national

unity, der nationalen Einigkeit 国民的一致) を初めてもたらしたのは、彼女なのだと。<82> このように彼は、ヘレネーを、彼がその少しあとに『民族祭典演説』(前380年)——ギリシア諸国家を非ギリシア人 (the barbarians, die Barbaren) に対する国民的な撲滅運動 (a national crusade, einen gemeinsamen Nationalkrieg 共同の国民的戦争) で統一しようとする偉大な苦闘の (of the greäte struggle, des Programms 行動計画の)——でいっそう十全に述べている、(いわば: gleichsam) 政治的熱望の神話的象征にしている。イソクラテースは、この最初の十年は⁽²⁾、まだ (まったく: vollkommen) ゴルギアースによって踏み固められた道を動いている。彼の『民族祭典演説』とゴルギアースの *Olympicus* [=『オリュンピア演説』]⁽³⁾ との関係は、彼の『ヘレネー頌』とゴルギアースの *Defence of Helen* [=ゴルギアースの『ヘレネー頌』]⁽⁴⁾ との関係と同じである。小弁論 [=『ヘレネー頌』] は (彼が言うように<83>)、教養を重んじる人間 (a man of paideia, den Vertereatern der Paideia) にふさわしい初穂の捧げものである。これ [=『ヘレネー頌』] は、その新しくなったソクラテース学派とその教養理念 (cultural ideal, Bildungsideal) に対する論駁の故に興味深い。<84> 彼はここで再び、ソフィスト論におけるのと同じように、プラトーンとアンティステネース⁽⁵⁾ の容貌を一つの合成の肖像のなかで混ぜる。彼の攻撃は、一人の特定の人間にではなく、新しい運動 (the new movement, dieser neuen Erziehung この新しい教育) の全傾向に向けられている。イソクラテースは、彼らのうちのある者 (アンティステネース) は、誤った言明 (a false statement, falsche Aussage) を述べることも同一物について二つの矛盾する主張 (assertion, Sätze 命題) をすることも不可能であると教え、しかるに他の者 (プラトーン) は、勇氣 (courage, Tapferkeit) も知恵 (wisdom, Weisheit) も正義 (justice, Gerechtigkeit) も一つの同一のものであり、これらの諸資質の一つとして我々に生来には備わっておらず、それらはすべて一つの同一の知識 (ἐπιστήμη: 知識、学知) によって獲得されるということを証明しようとしているとき、彼らの言辭 (their utterance, ihre Behauptungen) を逆説的な機知 (paradoxical wit, geistreicher Paradoxie 才気に満ちた逆説性) の企て (attempts, der Sucht 欲求)⁽⁶⁾ としてしか理解できないと言う。<85> このとき (here, diesmal 今回は) イソクラテースは、実に、ソクラテースを、単なる論争家たち、(つまり) (そもそも: überhaupt) だれをも教え (teach, erziehen 教育し) ないが、しかしただ他者に面倒なことを言おうとしている人たち、と区別している。彼は、彼ら自身がつくの昔に論駁され (refuted, widerlegt) できているのに、彼らのだれもが他者を非難し (refute, widerlegen 論駁し) (ἐλέγχειν)⁽⁷⁾ ようにしているとって反対し (objects, wirft~vor 非難し)、<86> また彼らの逆説が、彼らの先行者であるソフィストたちのそれによって影を薄れさせられているとって反対する: たとえば、存在するものは何もない (no existing thing exists, nichts Seiendes sei) というゴルギアースの言明、あるいは、同一のことは可能でもあり不可能でもあるというゼーノーン⁽⁸⁾ の言明、あるいは、見たところ無限の多数のものは実際には一つであるというメリッソス⁽⁹⁾ の言明によって。<87>

『イソクラテースはプラトーンの真実探究の努力の政治的意味を認めつつもその政治的有益性は否定する』イソクラテースは、このごまかし (pettifoggery, Taschenspielererei 奇術) と、真実であるもの (what is true, sachlicher Wahrheit 本質的な真実) を見つけ出そうとする地味な努力とを対比する: (つまり: nämlich) このこと [= 真実であるものを見つけ出そうする地味な努力] を、彼は真実 (reality, der Realität) の経験を得るための、ま

た政治的行動に向かって自己を形成するための努力だと思っている。哲学者たちはいつも純粋な知識 (pure knowledge, einer reinen Erkenntnis) の幻影を追い回しているが、しかし (結局: am Ende) だれもその結果を使用することができない。仮にわれわれがそれらに関して厳密な知識 (exact knowledge, exaktes Wissen) ではなくたんにおよその見解 (approximate opinions, zutreffende Meinungen 適切な考え) しか獲得できないにしても、人びとが実際に求めていることについて専念することの方が、好ましくはないか? 彼は、プラトーンの科学的な (scientific, wissenschaftlichen) 厳密さと完璧さの理想 (ideal, Ideal) に対する自分の態度を、われわれの本当に重要なことからの知識のほんのわずかな進歩 (advance, Vorsprung リード) も、われわれの生活にとって今日的な意義をもたない (irrelevant, keinen Nutzen 有益性のない) 重要性のない無価値なことの非常に偉大な知的な (intellectual, geistigen) 卓越 (mastery, Überlegenheit) よりも良い、という定式文句 (the formula, die Formel 簡潔な言い回し) に変える。^{<88>} 明らかに彼は、すぐれた心理学者 (psychologist, Psychologe) として、青年たちがどれほど弁証法的な論争 (dialectical disputation, die Streitkunst der Dialektik 弁証法という論争術) を愛しているかを理解している——というのは彼ら [= 青年たち] の年齢では、彼らはまじめな私的ないし公的問題に何の興味ももっていないのであり、勝負 (a game, das Spiel) が無用であればあるほど、彼らはいっそうそれを楽しむのである。^{<89>} しかし彼らを教えると公言する者たちは、彼らにそれ (it, solchem Sport そのような道楽) に魅せられるようにさせておく故に非難に値する。彼ら [= 彼らを教えると公言する者たち] はそれによって、彼ら (自身: selbst) が法廷雄弁家たち (forensic orators, den Vertretern der gerichtlichen Beredsamkeit 法廷雄弁術代理人) たちを非難する——彼らは若者を墮落させる、という——その同じ罪を背負いこむ。^{<90>} 彼らは、あらゆる政治的な権利や義務を剥奪された乞食や追放者たちの方が他の者たち——つまり、平和的に祖国にとどまる完全な市民たち (the full citizens, der Vollbürger) ——よりも幸福であるというバカげた見解 (absurd doctrine, der Absurdität たわごと) を説くことにひるんだりしない。(これは明らかに、ソクラテース学派のなかの急進派——アリステネースとアリスティッポス⁽¹⁰⁾、そして彼らの弟子たち——の倫理的な個人主義 (individualism, Individualismus) と世界市民主義 (cosmopolitanism, Kosmopolitismus) への当てつけになっている。^{<91>})⁽¹¹⁾ 彼は (むろん: freilich) 他の哲学者たちを、いっそうばかばかしいと見ている: 自分たちの道徳的な逆説が、国家の (of the state, der politischen Gemeinschaft 政治的な共同社会の) 精神的な構築に (the spiritual upbuilding, geistigen Aufbau) 本当に何らか貢献 (contribute something, schöpferischen Beitrag 創造的な貢献) をすると考えている人たちを。これ [= 後者] は、ソクラテースの道徳的福音 (moral evangel, die sittliche Botschaft) が真の政治学 (political science, politische Wissenschaft)⁽¹²⁾ であると考えた、プラトーンへの当てこすりでしかあり得ないであろう。^{<92>} もしこの同定においてわれわれが正しいとすれば、イソクラテースがプラトーンの教養理念 (cultural ideal, Bildungsidee) についての自分の見方を変え、それ [= プラトーンの教養理念] もまた政治的な含み (political implications, eine politische Bildung 政治的な教育) をもっていると認めたのは、早くも (前300) 80年代、つまり彼の『ソフィストたちを駁す』の執筆のすぐ後、のことであった。だがしかし彼は、それ [= プラトーンの教養理念] の、個人の道徳性 (individual

morality, das Ethische 倫理性) への、そして (なかんずく: vor allem) 弁証法のつまらない議論 (quibbles, die Spitzfindigkeiten むやみに細かいこと) ——それは彼には (to him, dem Außenstehenden 部外者には) プラトンの教育学説 (educational system, Erziehung 教育) の特徴的な傾向のように思われた——への集中 (concentration, die Konzentration) は、それがかなうと公言する、普遍的に有益な目的とは絶対に一致しない (absolutely irreconcilable, unauflösbarem Widerspruch 解くことのできない矛盾)、と感じた。

<注記と考察>

- (1) ヘレネー：ギリシア神話のなかの、トロイア戦争の原因となった絶世の美女で、さまざまな伝説が残されている。なお小池訳書 (2002年) では、『ヘレネー頌』ではなく『ヘレネ頌』と訳されている。小論では、この二つの表記を適当に使っていく。
- (2) イェーガーは、イソクラテスの法廷演説の残存を「(前) 390年ぐらいまで追うことができる」とし、「それゆえに、イソクラテスの学校の創設はプラトンのそれとおおよそ一致する。」と叙述している (本継続研究 (11) III. 5. 「イソクラテスの弁論学校の設立趣意書と判断される『ソフィストたちを駁す』に、プラトーン (の学派) との論争の最初の足跡を見ることができる」)。なお、プラトーンのアカデーメイアの設立は、松原著は「前387年頃」としている。イェーガーが「この最初の十年」と述べているのは、このイソクラテスの学校設立後の10年ほどのことを言っている。

このようにイェーガーは、イソクラテスの学校設立後の諸著作を、『ソフィストたちを駁す』→『ヘレネー頌』→『民族祭典演説』(前380年) という年代関係で見ている。

ところで『イソクラテス 弁論集1・2』の訳者小池は、その『ヘレネ頌』の訳注で、この作品の執筆年代推定に関わって次のように記している。

…アンティステネスは前366年に没。「老齢を迎えて」という箇所は、彼がまだ存命中であることを示唆する。後出三節から、ゴルギアスはすでに物故していたとみられる。だとすると、本著作の執筆は前370年頃。プラトンの『パイドロス』とほぼ時期を同じくする。

また小池は、訳書全体の「解説」文で、「イソクラテスが神話に題材を取った『ヘレネ頌』はアルキダマスその他への再反論が含まれるが、これはプラトンの『パイドロス』が意識されているのもっとのちの時代、おそらく前370年頃の作かもしれない。」と述べている。

なお小池が『イソクラテス 弁論集1・2』の訳業に際して参照した文献リストのなかには、イェーガー『パイデシア』第Ⅲ巻 (Berlin, 1947) も入っている。また、ゴルギアスは、「…非常な高齢に達して老衰で死んだ (105歳ないし109歳)」ということで、その生没年は「前485頃～前380頃」ということである (松原著、ゴルギアスについては本継続研究 (6) II. 3. (→9.) の<注記と考察> (2))。

- (3) ゴルギアースの *Olympicus* [=『オリュンピア演説』] については、『ソクラテス以前哲学者断片集 第Ⅴ分冊』(岩波書店、1997年) 所収の「ピロストラトス」「アリストテレス」「プルタルコス」の著述から知られるが、松原著では下記のように説明している。

前408年にはオリュンピアで大群衆を前に演説し、アカイメネース朝ペルシア帝国に対決するべくギリシア人は和解・団結すべきだ、と訴えたといい、…

- (4) ゴルギアースの *Defence of Helen* [= ゴルギアースの『ヘレネー頌』] については、上記『ソクラテス以前哲学者断片集 第V分冊』所収の「ゴルギアース『ヘレネ頌』」によって知ることができる。
- (5) アンティステネース：前455/444年頃～前365/360年頃。アテーナイ生まれの哲学者。本継続研究(12) II. 6. の〈注記と考察〉(8)を参照のこと。
- (6) ドイツ語版では aus der Sucht になっているが、als der Suhct の誤植か。
- (7) ἐλέγχω：「非難する」「試す」「問い質す」「反駁する」
- (8) ゼーノーン：前490年頃～前430年頃。エレア派の哲学者で、松原著では次のように説明されている(抜萃)。

ゼーノーンは師パルメニデースの一元論を支持し、その説に反対する者を矛盾に陥らせる一種の帰謬法を用いて相手を論破。「アキッレウスは亀に追いつけない」(…中略…)や「飛ぶ矢は静止している」(…中略…)などの、いわゆるゼーノーンの論法 paradoxos, παράδοξος を展開したことで知られる。このため彼はアリストテレスによって「弁証法(問答法)ディアレクティケー-dialektike, διαλεκτική」の創始者とされた。40歳近くの頃、師とともにアテーナイを訪れ、講義を開いてペリクレスや若きソクラテースに感銘を与え、後者の問答法やソフィストの論争術に影響するところ甚だ大であった。

- (9) メリッソス：前490年頃～前430年頃。エレア派の哲学者で、松原著では次のように説明されている(抜萃)。

他の哲学諸派に対して師の教説を擁護し、エンペドクレスの多元論やアナクシメネースの濃化稀化の概念を批判。実体(宇宙)は不変・不動なものであるとしたが、パルメニデースとは異なり、「それは空間的に無限な存在である」と主張した。

- (10) アリストティッポス：前435年頃～前350年頃。ギリシアの哲学者で、「快樂主義を標榜するキューレーネー学派 Kŷrēnaioi の創始者とされる」ということである(松原著)。
- (11) イェーガーのこの叙述は、イソクラテースの『ヘレネー頌』8. の論述を吟味したものであるが、誰に対する「当てつけ」になっているのかは、小池訳書には訳者注記がない。

なお訳文中の「そして彼らの弟子たち」は、英訳版で補筆されたものである。

- (12) ドイツ語版では、ここに言い代えとして、πολιτική τέχνη、が挿入されている。πολιτικός には「市民にふさわしい」「共同体の形で生活する」「国の、政治の、公共の」「自由な国家にふさわしい」「政治家の」といった意味があり、τέχνη には「わざ、技巧、専門的技術、技芸、学問」といった意味がある。

12. 特定の政治的問題への直接的有効性を重視するイソクラテースはプラトーンの理論探究がもつ巨大な教育的な力を理解し得ない

<訳文>69p～70p

このように、イソクラテースとプラトーンとがお互いにその教養論(cultural theories, Bildung 教養)の実践的目的(the practical aim, dem praktischen Ziel)⁽¹⁾においてお互い

にどんどん近づいていく (approach, übereinstimmen 一致する) ように見えるのであるが、プラトーンの理論的な‘回り道’ (abstract ‘roundabout way’, weiten theoretischen „Umweg“ はるかに理論的な‘回り道’) ^{◀93▶} に対するイソクラテースの不満 (disapproval, die Abneigung 反感) はますます顕著になる。彼はただ直接的な道を知っている。彼の理論 (his system, seine Erziehung 彼の教育) には、プラトーンの、行動 (action, Handeln) への差し迫った意思と行動のための長い哲学的な (philosophical, theoretischen 理論的な) 準備 (の慎重さ: der Zurückhaltung) との間の心に存するような、内的な緊張 (the inward tension, der inneren Spannung) は少しもない (none of, weiß nichts 少しも自覚していない)。確かに彼は、彼の時代の政治と同時代の政治家たちの活動からは、それらに対するプラトーンの異議を理解するのに、十分にゆとりをもって離れている。しかし彼は、中道路線を固守する人間として、国家と個人の大きな隔たりを引き起こす、ソークラテース学説 (the Socratic system, der Sokratik ソークラテース哲学) の大胆な倫理的要求 (ethical claims, sittliche Forderung) をよく理解することができない。彼は、政治的生活の改善をユートピア (Utopia, der Utopie 空想の産物) に頼ることはしない。彼は (おそらく: wohl)、資産と教養のある (cultured, gebildeten) 市民に特有な、愚民政治の (of mob-rule, der Massenherrschaft) 激情に駆られた常軌を逸した行為に対する、また少数の専制政治に対するしんからの嫌悪、を表わすし、また彼は、尊敬に値することに対しては強く感嘆する。しかし彼は、プラトーンがもっている改革に対する非妥協的な熱中 (uncompromising passion for reformation, der kompromißlose reformatorische Geist 妥協をしない改革者的な精神) というものを全く持ち合わせていないし、そういうぞっとするような集中を日々の生活に持ち込むつもりは毛頭ない。それゆえ彼は、プラトーンの考え (thought, Haltung 考え方) にある巨大な教育的な力を理解しない: 彼はその [= プラトーンの考えの] 価値を、もっぱら、自分に興味をを起こさせる特定の政治的問題に対する直接的な有効性で判断する。これ [= 彼に興味をを起こさせる特定の政治的問題] というのは (しかし: aber)、今次大戦^②後の、ギリシアの国内の状態であり、ギリシア諸国家のお互いにとってのこれからの関係である。ペロポネネーソス戦争は、現存している政治体制 (regime, Zustands 状態) は永続し得ないことを、また全ギリシア世界が再建されなければならないことを、明瞭に示していたのであった。イソクラテースが『ヘレネー頌』を執筆したとき、彼はすでに彼の偉大な宣言書 (manifesto, Manifest) 『民族祭典演説』を執筆中であった。その目的は、世間の人々に (the world, der Mitwelt 同時代の人々に)、自分の学校は新しい言葉づかいで新しい理想 (ideals, Ziele 目標) を明確に提示することができる——個人の道徳的生活に対してだけでなく、ヘレネーの全国家に対しても——、ということを明らかにすることであった。

<注記と考察>

- (1) この教養思想史の源において語られる「教養論の実践的目的」には、「教養」の歴史的な性格を考察するうえで、格別に注目しておきたい。
- (2) the great war (dem großen Krieg) を「今次大戦」と訳しておいたが、「ペロポネネーソス戦争」のことである。

Ⅲ. 3 政治的教養と汎ギリシアの理想 (POLITICAL CULTURE AND THE PANHELLENIC IDEAL, POLITISCHE BILDUNG UND NATIONALE IDEE 政治的教養と国民の観念) (その1)

英訳版第Ⅲ巻、第4篇：71p～83p

1. ギリシア諸都市国家間における帝国主義（思潮）の克服とパイデアー（教育・教養）との相互関係——ギリシア国民の連帯意識の増大

<訳文>71p～74p

『イソクラテースも弁論術の単なる技巧性を克服しようする』弁論術は、そもそも、実践的な政治の手段である。しかしそれが政治的手腕の理想 (ideals of statesmanship, der Politik Ziele 政治目的) を述べる能力をもつや否や、それは政治的な教養形式 (a political form of culture, einer politischen Bildung) を代弁するものとなる。イソクラテースはこのことを自らの、哲学との対抗をとおして発見した。というのは、プラトーンが弁論術中で痛烈に論難したのは、道徳的な無関心であり、それを [= 弁論術を] 貪欲で無節操な政治家たちの手にある道具以上のものにさせないでおく純粋な形式への専心 (Formalismus 形式主義) であった。彼 [= プラトーン] が哲学 (philosophy, die Philosophie) が唯一の真の弁論術であると信じるのは、そういう理由であった。イソクラテースは、哲学の教育的な力としての大きな強みは、それが高遠な道徳的理想 (ideal, Zieles 目標) をもっていることにある、ということを理解した。それにもかかわらず彼は、その理想が尊敬を要求する権利をもつ唯一のものだとも、哲学者たちによって選ばれた手段がそれ [= その理想] を達成しそうだとも信じなかった。それゆえに彼は、弁論術にその内容として‘最高のもの (the highest things, die höchsten Dinge)’ を与えることによって、それ [= 弁論術] を唯一の真の教養 (culture, Bildung) に作り替えようと決心した。<1>彼は、彼よりも前に弁論術を教えていたソフィストたちやプラトーンやアリストテレスと同じように、特定の職業 (a particular vocation, einen Beruf) に対する専門家養成 (specialist training, Ausbildung 養成専門教育) 以上のものであろうとする教養 (culture, Bildung) というものは政治的教養 (political culture, politische Bildung) でなければならない、ということにほとんど疑念をもてはいなかった。しかし弁論術 (rhetoric, der Redekunst 雄弁術) はまだ重大な使命を、その中に潜在している人格形成力 (the formative forces, formenden Kräfte) を解放する任務を、欠いていた。これまでのすべての弁論術が無内容でさげに見える唯一の理由は、それがいつも間違った出発点を選んできたことにあった。様式とことば使いを上達させることは、単なる技巧 (technique, Technik) の問題ではない。‘芸術のための芸術 art for art’s sake’ という理想 (the ideal) は、どこにおいても文学の領域 (in the realm of literature, in der Kunst des geistigen Ausdrucks 精神的表現の芸術)⁽¹⁾ ほどにはあり得ない。繰り返しイソクラテースは、話し手にとっても語り手にとってもすべてのことはその人が論じなければならない主題の偉大さ (the greatness, der Größe) に拠っているという点を強調する。

『ギリシア諸都市国家間における帝国主義（思潮）の破滅性とイソクラテース』それゆえに弁論術の主題はいつも‘政治的 political (Politisch)’ でなければならない——‘政治的’ということばは、ちょうどイソクラテースが書いているとき、その古い単純な意味を変えつつあったのではあるが。文字どおりには、それは ‘concerning the polis ポリスに関わる’

を意味する——つまり、共同社会 (community) に役立つかそれを損なうことである。しかし、究極的にはポリスはすべての公的生活にとって依然として枠組み (the frame, der Rahmen) だったのだけれども、(それにもかかわらず: doch) (紀元前) 5 世紀の重大な出来事 (the great events, die geschichtliche Entwicklung 歴史的な展開) は新しい様式 (patterns, Formen) を生みだし、新しい必要性 (needs, Notwendigkeiten) を顕現させたのであった。ペリクレスの帝国の崩壊は、一つの差し迫った問題を未解決のままにしていた。〔つまり〕アテナイはあくまで、自らの粉々になった力を徐々に再建し、それからもう一度、すでに自らを破局の淵にまで導いてしまった、その帝国主義的な拡張がたどる道に入ろうとするか？それとも、少なくとも目下は唯一のギリシアの支配者であるスパルターと、征服された海の女王 [= アテナイ] との間に何らかの暫定協定 (*modus vivendi*, des Ausgleichs 調停) ——つまり二つの偉大な国家のそれぞれに、生活空間だけではなくそれらの特殊利害を超越する共通の使命 (task, Aufgabe) をも提供するであろう何らかの妥協——が打ち建てられることが可能なのか？職業政治家たちは (引き続き: weiter) 伝統的な方向で考え続けた。〔つまり〕彼らは権謀術数をあやつる権力闘争を再開した: 90年代 [= 紀元前390年代] においてさえ、コリントス戦争⁽²⁾ は、ギリシア諸国家 (the Greek states, der griechischen Stadtstaaten ギリシア諸都市国家) が、明らかにスパルターを動けなくすることをねらった防御態勢 (a defence-system, deren Abwehrfront 防衛線) をもつ新しいパワーブロック (power-bloc) をつくることに忙しい、ということを実証しているのである。しかるにイソクラテースは、ギリシア人の過剰な精力のはけ口を見出そうと努力した: つまり、何らかの政治的、経済的な拡張の形態で、それが同時に、いら立っているギリシア諸国家の内部抗争を解決するかもしれないものを。彼は、もちろん、永遠なる平和が獲得され得るとはまったく考えていなかった。しかし、被征服者のみならず征服者を含む、すべてのギリシア都市 (city, Staaten 国家) の生活 (the life, das Leben) に与えた戦争の破壊的な影響を見ながら、本気で傍観し、この高貴な国民 (nation, Nation) が徐々に間断なく自らを死へと切り刻んでいるのをじっと見るのできる教養人 (cultivated man, Gebildeten) は一人もいなかった。‘善意’ と高い知性をもつ人びとは、自分たちが、ギリシア人を彼らにのしかかっているぞっとするような恍惚状態⁽³⁾ から自由にする何らかの反対方向の魅惑する力 (counter-charm) を見出す義務がある、と思った。帝国主義は不可避であった。それならばそれ [= 帝国主義] は、もともとギリシア人に敵対し低い文化 (civilization, der Bildung 教育) 水準にある、他の人びとに向ける。それ [= 帝国主義] は、ギリシア人によってギリシア人に対して遂行されつづけ得るものではなかったのであり——その時代の道徳感覚は、それを耐え難いと感じたのである。(つまり: denn) 結局はそれ [= 帝国主義] は、被征服国家 (state, Staat) だけでなく全ギリシア民族を完全に絶滅すると脅したのである。

『増大する (ギリシア) 国民的な連帯意識とパイディアーとの相互関係』長い間調和 (harmony, die Eintracht) は、詩人やソフィストたちによって、すべての善 (goods, Gut) のなかの最高のものの一つとして賞賛されてきていた; しかしアイスキュロスが『恵みの女神たち (エウメニデス)』⁽⁴⁾ で、一つの都市 (city, Stadt) のなかの市民の (of the citizens, der Bürger) 調和 (the harmony, die Eintracht) をあらゆる政治的生活 (political life, politischen Lebens) の神々しく神聖化された理想 (ideal, Ziel 目的) として描写し

てから、^{◁2>}問題はより複雑になり、その範囲は広がった。今や、なんらかの役に立つ唯一の調和 (harmony, Eintracht) は、全ギリシア人を包含する (embraced) もの (deren Band その絆) だけであった。ギリシアでは、その民族 (its peoples, Stämme 部族) のすべてが同じ言語 (異なる方言ではあるが) を話しているという、また彼らはみな目に見えない政治的共同社会 (political community, politischen Gemeinschaft) の一員であるという、また彼らはお互いに相互の尊敬と相互の支援の恩恵を被っているという感情が増大しつつあった。^{◁3>}もちろん、この結束の趣旨がギリシア主義 (Hellenism, der griechischen Rasse ギリシア人の種族) の国境 (the frontiers, den Grenzen) で止まらなければならない理由を見出さない何人かの進歩的な自由主義者たち (advanced liberals, Aufgeklärten) もいた。彼らは、人間性 (humanity, Mensch-seins 人間存在) そのものの絆 (the bond, das Band) はあらゆる人を包含するものであり、本来は国民であること (nationhood, der Nation 国民) の絆よりもつよいものであると考えた。プラトーンは、『プロタゴラス』でソフィストのヒッピアースにこの見地を述べさせており、⁽⁵⁾ アンティポーン⁽⁶⁾ も彼の *Truth* (『真理について』) でそのこと (it, ähnliche Ansichten 似たような見解) を述べている。^{◁4>}しかしそれ [= この見地 (dieser Gedanke この考え)] は、ギリシア人が他の国民 (nations, Völkern) よりも (はるかに: weiter) お互いのことを悩んできており、目下の (immediate, nächstliegende ごく自然に思いつく) 問題が如何に相争う隣人たちを和解させ兄弟の憎しみを癒すかということであった、そのような時代には、非常に抽象的に見えたに違いない。今次大戦 (the greate war, des großen Krieges) [= ペロポネネーソス戦争] の間、喜劇と悲劇の詩人たちはしばしば、憎しみと復讐の (vendetta, Stammeshasses 一族の憎悪の) 情熱的な言辞によってだけではなく、賢明で愛国的な (patriotic, patriotischen)、共通の素性と共通の国民性 (common origin and common nationality, der gemeinsamen Abstammung 共通の血筋) を思い起こさせるもの (reminders, Mahnung... gedenken 思い起こす警告) によっても、つよく意見を表明してきていた。^{◁5>}戦後、その [= 共通の素性と共通の国民性という] 考えはいよいよ広範囲に広がったに違いない。それはかつては (once, ursprünglich もともとは)、その思考を都市国家の狭い領域 (frontiers, Kreis) に限定していたギリシア人には、ほとんどまったく疎遠なものではあった; しかし意識的な敵対は平和的な隔絶よりも、隣人 (neighbours, den Menschen 人間) をより親密に結び合わせる。プラトーン自身 (もまた: auch)、『国家』において、明らかにこの新しい考え方 (ideas, Denkart) の影響を受けているのである。その影響は、彼が、ギリシア人の諸国家 (Greek states, Griechen ギリシア人) 間での戦争行為 (the conduct of war, der Kriegführung 戦争遂行) に対して据える倫理的原理に見られるのである。⁽⁷⁾ ^{◁6>}同時にまた彼の書簡においては、彼は、シケリアーの全ギリシア人の共通利害 (the common interest, das gemeinsame Interesse) が、全政治権力の独裁者ディオニューシオスの手への集中を、もし彼が自らの国家に憲法 (a constitution, eine Verfassung) を付与し独裁制の専横な規則を廃棄するのに同意しようとしさえすれば、(十分: genügende) 正当化すると考えている。⁽⁸⁾ ^{◁7>}アリストテレースは、彼の政治理論は古い都市国家の国境 (frontiers, die Grenzen) を超えることはないが、それにもかかわらず、もしギリシア人が一体になるならば彼らは世界を支配することができるであろうと断言する。^{◁8>}それゆえにギリシア人の共同的な行動 (joint Greek action, einer gemeinsamen Aktion) という考えで、そ

れが全ギリシア人の一つの永続的な連合 (a permanent confederation, eines dauernden Bundes) というものではないにしても、4世紀の人びとの心はひどくいっぱいだったのである。(たしかに： zwar) 彼らの政治的観念 (political ideas, Staatsbegriff 国家概念) には、一つの統合された国民国家 (a unified national state, eines nationalen Einheitsstaates 国民的な統一国家) を予示するものはほとんどなかった；ギリシア人が ‘political’ と呼ぶ生活、つまり市民が自由であるのと同時に共同社会に尽くすことに活発にかかわっているような生活、⁽⁹⁾ のための条件は、都市国家の精神的国境 (spiritual frontier, Lebensgemeinschaft der Bürger 市民の生活共同体) の狭さにあまりにも親密に結びついていたので、いっそう広い領土枠組みにおけるよりいい加減な市民的行動の性格 (the looser texture of citizenship, das zerstreute Dasein 心ここにあらずの生活) に苦もなく変換されるということではなかった。しかし (but, aber) 増大する国民的な連帯意識とともに、都市国家をはるかに超えて及ぶ、それゆえに国家の自己中心的な武力外交への利己的な没頭を制限する、(いわば： gleichsam) 倫理的な拘束力をもつ (ethical restraints, sittlicher Bindungen) 学説が発達しつつあった。もしわれわれがこの新しい意識の起源を探すならば、われわれはそれが、血、言語、宗教、習慣、それに歴史の共通性 (community, der Gemeinsamkeit) に深く横たっていることを見出すだろう。それにもかかわらず、歴史の初期には、これらの超理性的な (these suprarational, diese übernationalen 超国家的な) 諸力は、意識的な目的 (conscious purpose, bewußten Sinne 意識的な意味) の同様の影響を及ぼすことはなかったであろう。ギリシア人の今日覚めている感情 (sentiment, Empfinden) は、教育・教養 (education and culture, der Kultur und Bildung ⁽¹⁰⁾) によって生み出された。そうして、今度は、ギリシアのパイデイアー (Greek paideia, die griechische Paideia) が、この新しく沸き立つ汎ギリシアの理想 (Panhellenic ideal, panhellenischen Zeitströmung 汎ギリシアの時流) で満たされることによって、大いに刺激され豊かにされた。

<注記と考察>

- (1) ここでの「文学の領域」とは叙事詩などを指しているのであろう。
- (2) コリントス戦争：前395年～前386年。このイエーガーの叙述は、ペロポネネソス戦争終了（前404年）後10年の「前395年」に「すでに (bereits)」コリントス戦争が…、という意味合いである。

なお松原著の「コリントス」の項における「コリントス戦争」の箇所を、下記に抜き書きしておく。

(コリントスは…) ペルシア戦争では活躍する (前480) が、やがてケルキューラをめぐるアテナイと争い、これが原因となってペロポネネソス戦争 (前431～前404) が起こった。戦後、ギリシアの覇権を握ったスパルタの弾圧に反抗して、テーバイ、アテナイ、アルゴスらと結ぶと、コリントス戦争 (前395～前386) に突入、一進一退の戦況が続いたが、ついにペルシア大王アルタクセルクセース 2 世の介入によりアンタルキダースの和約 (大王の和約) が成立した (前386年)。…

- (3) ここはドイツ語版では diesem Albdruk (胸苦しき) となっている。
- (4) アイスキュロス：前525/524～前456/455年。ギリシアの悲劇詩人で、「悲劇の父」と称

される。その完全な形で現存する7作品のうち、『アガメムノーン』『供養する女たち』『恵みの女神たち (エウメニデス)』は、「完全な姿で残った唯一の三部作 (トリロギア trilogia) 「オレスティア (オレステース物語)」を構成し、アイスキュロスの最後にして最大の傑作と評されている。」ということである (松原著)。なおアイスキュロスについては、本継続研究 (7) II. B.1. の〈注記と考察〉(2), 64 p を参照のこと。

- (5)『プロタゴラス』の337Cの後段～338Bにヒッピアースの語りがあり、その前半は次のとおりである (藤沢令夫訳、岩波文庫『プロタゴラス——ソフィストたち——』岩波文庫、1988年、に拠る)。

プロディコスがこのように述べると、その場の多くの者がこれをたたえ迎えた。

プロディコスのつぎに、知者ヒッピアースが語った。

「満場の諸君、私は諸君のすべてが同族の間柄 (συγγενεῖς, kinsmen) であり、近親 (οἰκείους, intimates) であり、同市民 (πολίτας, fellow-citizens) であると考え——ただし法においてではなく (οὐ νόμῳ, not by law)、自然において (εἶναι φύσει, by nature)。なぜならば、相似たる者は自然において互いに同族の間柄にあるのであるが、これに対して法は、人の世を支配する専制君主であって、多くの反自然的なことを (παρὰ τὴν φύσιν, against nature) 強制するからである。——さればわれわれが、事物の本性 (τὴν μὲν φύσιν τῶν πραγμάτων, the nature of things) を知りながら、そしてギリシア人ちゅう最高の知者として、まさにそのゆえにいま、ほかならぬギリシアの知恵の殿堂たるこの国に集まり、さらにこの国そのものの中でも最も大きく、最も祝福されたこの家に相会しながら、そのような尊厳 (τοῦ ἀξιώματος, this dignity) にふさわしいことを何ら示すことなく、あたかも世の最も卑小な者どものように、互いに相争うがごときは、けだし恥辱というべきであろう。

かくて私はあなた方に向かって、プロタゴラスとソクラテスよ、かつは懇願しかつは忠告したいのだが、あなた方は、いわば調停者であるわれわれの仲裁に従って、中間へ歩みよりたまえ。…」

- (6) アンティポーン：前430年頃活躍。アテーナイのソフィストで、アテーナイの弁論家であるアンティポーン (前480頃～前411年) と同時代の人で、「両者はしばしば混同される——同一人物説もあり——」ということである。「夢占いを得意とし、夢判断の書を執筆 (亡失)」したという。(松原著)
- (7) イェーガーが原文注記₆で示している論述箇所には、そこの原文注記として、「プラトーン自身は、ギリシア人同士の戦争に対して規則 (regulations, seinen Satzungen 規約) を与えるとき、自分の国家 (Republic, Polis) がギリシア人の国家 (a Greek state, der griechische Charakter ギリシア的な性質) であるという事実をとりわけ意識しているように見える」と記し、参照箇所として、『国家』における「戦争」を論じている複数部分を指示している。その指示の部分の二箇所 (ソクラテースとグラウコンとの会話) を下記に引いておく (藤沢令夫訳、岩波文庫、上、1979年、に拠る)。

469 c

「ではつぎにどうだろう、——敵たちに対しては、われわれの兵士たちはどのように振舞うことになるだろうか？」

「どのような点で？」

「まず第一に、相手を奴隷にすることについてだが、君には、ギリシアの国々がギリシア人を奴隷にすることが正しいと思えるかね？それとも、それは他のどの国にも、できるかぎり許してはならないことであって、むしろ、夷狄によって奴隷にされないようにという警戒のもとに、ギリシア民族を大事にする習慣をつけさせるべきだと思うかね？」

「あらゆる点で全面的に」と彼は答えた、「そうしたほうがよいにきまっています」

「そうすると、ギリシア人を奴隷として所有するということも、彼ら自身もしてはならないだけでなく、他のギリシア人たちにもそのように忠告しなければならないわけだね？」

「まったく賛成です」と彼は言った、「じっさいそのようにすれば、彼らはもっと夷狄たちのほうに立ち向かって、自分たちの間では互いに手を控えるようになるでしょうからね」

470 c

「ではこの点も、ぼくの言うことが当を得ているかどうか、見てくれたまえ。すなわちぼくの主張では、ギリシア人の種族はお互いどうし身内であり同族であるが、夷狄に対しては異民族でありよそのものである」

「言われるとおりです」と彼。

「したがって、ギリシア人が夷狄と、また夷狄がギリシア人と戦う場合には戦争するとわれわれは言い、両者は自然本来の敵であると言うだろうし、そしてこの敵対関係は〈戦争〉と呼ばれなければならない。けれども、ギリシア人がギリシア人に対して何かそのようなことをする場合は、両者は自然本来には友であるが、ただそのような状態においては、ギリシアは病んで内部が割れているのだと言うだろうし、そしてこのような敵対関係は〈内乱〉と呼ばれなければならない」

イェーガーは、同じ原文注記で、続けて「470e では、彼〔＝プラトーン〕は、ソークラテースが建設している国家（the state, die Stadt 都市）はギリシア人のそれであるべきだ、とはっきり言っている」と記している。その箇所は、下記のとおりである（藤沢訳に拠る）。

470e (の一部)

「さて、そこでどうだろう」とぼくは言った、「君が建設している国家は、ギリシア人の国となるはずではないかね？」

「たしかにそうであるべきです」と彼。

(8) ディオニューシオス：前430年頃～前367年。シュラークーサイの僭主で、松原著には次のような説明がある（抜萃）。

専断的・圧政的ではあったが、シュラークーサイを偉大な^{ポリス}都市国家 polis とし、マグナ・グラエキアはおろかギリシア本土の諸都市にも勢力を及ぼした点で卓越した僭主と評価されている。ギリシア流に幾人かの若者を恋人にもつ一方、学芸を愛し

て哲学者プラトーンそのほか著名な文人や学者を宮廷に招き、アイスキュロスの使った机や書板、エウリーピデースの豎琴などを蒐集、また熱心な音楽家であり、自らも悲劇劇を書いてアテーナイやオリュンピアで上演させた。

また、「…プラトーンを奴隷として売り払った話もよく知られている。」「医学や軍学にも長じ、投石器（カタパルテース katapartes）の発明は彼に帰されている。」ということである。

イエーガーの原文注記《7》の箇所では、その注記でプラトーンの「第7書簡」324 b が指示されている。その箇所は、シュラクサイの故ディオーンの「身内ならびに同志諸君に」宛てられた手紙の冒頭で、下記のとおりである（『プラトン全集 14』岩波書店1975年、に拠る）。

では、故人の意図なり意欲なりとは、何であったか。これについてわたしはおそらく、憶測してではなく、確実に知る者として語ることがゆるされましょう。というのは、わたしが初めてシュラクサイへ訪れたとき、わたしは40ばかりになっていましたが、ディオーンはまだ、いまのヒッパリノスくらいの年頃で、しかも、そのころかれがいただくようになった見解がまた、かれの終生守り抜いたものでもありました。すなわち、「シュラクサイの市民は、解放されて(ἐλευθέρους, free) いなければならぬ——最良の法(νόμους, laws)に即して治められつつ」という、あの考えです。してみれば、いまのその青年〔ヒッパリノス〕がまた、神々のどなたかの力添えで、国家のあり方について、故人と同じ見解をもつようになったとしても、驚くには及ばないことです。しかし、そういう見解の生じ来たった経緯はどうであったのかという、そここのところを聞くのは、若い者にも若くない者にも、不似合いなことではありません。だから、そここのところをそもそもの発端から、わたくしは諸君を相手に、つぶさに跡づけてみましょう。このたびは、好機なのだから。

なお「第7書簡」はプラトーンを思想を理解するうえで重要な位置をしめているので（本継続研究（11）《原文注記》の〈注記と考察〉（21）、論文185p）、その「ディオーン（シュラクサイの）」（前408年頃～前354/353年）を理解するために、松原著より以下に引いておく。

シュラクサイの僭主ディオニューシオス1世の義弟にして女婿。義兄に重用され、哲学者プラトーンがシケリアへ来た時、その教説に傾倒し、彼に師事した。ディオニューシオス1世が死ぬ（前367）と、後継者ディオニューシオス2世の宰相として政務を補佐し、プラトーンを再びシュラクサイへ招いて、放縦な僭主を理想的な哲人王に仕立てるべく努力した。当初は若いディオニューシオスも哲学や幾何学に熱中し、全宮廷もそれに倣ったが、間もなく重臣ピリストスら反対党の誹謗を信じた僭主によって、ディオーンはプラトーンとほぼ同時期に追放される（前366）。アテーナイへ亡命した彼は、アカデーメイア学園の人々と交歓し、スパルターからは市民権を贈られる等の歓待を受けた。前357年、寡兵を率いてシュラクサイへ戻り、市民の支持を得てディオニューシオスを放逐、代わって自分が支配者になった（前355）。穏健な統治を心懸けたというが、民衆派のヘーラクレイデースと激しく対立しこれを殺害し（前355）峻厳な態度で人々に接するようになったため、野心家のアテーナイ人カッリッポス Kallippos（?～前351）の裏切りで暗殺された。

55歳。」「また彼は厳格にして傲慢、民主政を見下し、プラトーン哲学に心酔するあまり、プラトーン的な貴族政を確立しようとしたせいで、民衆から疎遠になり、その支持を失う結果となった。彼の統治は、シケリアー島にその後20年にわたる政治的・社会的な混乱を招くに至った。」

- (9) political (政治学の、国家の、政治的な、市民に関する) はラテン語の *politicus* (都市国家に関する、国政にかかわる、政治的な) に由来し、それはまたギリシア語の *πολιτικός* に由来する。*πολιτικός* には、「市民 (として) の、市民にふさわしい」「共同体の形で生活する、社会的な」「国の、政治の、公共の」「自由な国家にふさわしい」「政治家の」といった意味がある。

近現代になり見えにくくなっている「政治 (的)」の意味を検討しようとするとき、イエーガーの、「ギリシア人が ‘political’ と呼ぶ生活、つまり市民が自由であるのと同時に共同社会に尽くすことに活発にかかわっているような生活」という指摘は本質的な意味をもつだろう。

- (10) *der Kultur und Bildung* の意味合いであるが、*kultivieren* に「(人間・民族に) 教養を与える、教育する」という意味があるので、ここでは *Kultur* と *Bildung* とは親密な関係をもつものと解し、「教育・教養」と訳しておく。

2. 節 (1)

<訳文>74p~77p

『イソクラテースは『民族祭典演説』で全ギリシアの統合を主題として表現的完全性を目指している』教養 (*culture, der Bildung*) と目覚めつつある国民意識 (*national sentiment, nationalen Denkens*) との新たな (親密な: *enge*) 共同 (*partnership, Verbindung* 結びつき) は、イソクラテースの『民族祭典演説』において不滅のものとされる。演説 (*the speech, der Schrift 論文*) の初めに、現在の知的教養 (*intellectual culture, der Bildung des Geistes*) の価値低落 (*depreciation, die geringe Schätzung* 低い評価) が体育競技 (*gymnastic contests, Agone*) の伝統的な賛美と対比されている。^⑨そしてそのこと自体が象徴的である。というのはイソクラテースは、自分の小論を、汎ギリシア主義の大集会 (*assemblies, Festversammlungen* 祭典の集会) の一つで熱弁される、弁論術の立派な見本 (*show-piece, Schaustück* 展示品) に姿を変えよう (*disguise, der literarischen Fiktion nach* 文学的虚構に基いて) と決心するのであり、しかも同時に、類似した折にクセノパネースによってはじめて述べられた昔ながらの対比が自然にうまく収まっている。^⑩イソクラテースにとって、彼の主義は自らは政治論客として人民議会 (*the people's parliament, der Volksversammlung* 人民会議) の領域に入ることにはしないというものであり、お祭り騒ぎのように極度に装飾的で美辞麗句的な文体は自然なものである；そうして、それゆえに *panegyris* (国民的祭典)^⑪、つまり公式の大集会、は、彼が自分の最大の知的影響力を及ぼすことができる自然な環境 (*milieu*) である。^⑫オリュンピア (*Olympia*) とピュートー (*Pytho*)^⑬の祭典の間は、神の休戦 (*the truce of God, des Gottesfriedens*) がすべての戦うギリシア人に武器を棄てるよう命じたのである。そうであるならば、イソクラテースは全ギリシアの融和 (*the unity, Eintracht*) を唱道する (そこよりも: *als dort*) もっと良い環境 (*atmosphere, Atmosphäre*) をいったいどこに見出しただろう？ 太古以来、体育

競技は全ギリシア人の血統の理想的な統合性 (unity, Eintracht) のもっとも目に見える表現でありつづけた；しかし、理性 (reason, des Geistes 理知) の天分はすべての運動競技の偉業よりも共同社会 (the community, die Gemeinschaft) にとっていっそう価値があるのではなかったか？それが、クセノパネースが問うていたことであった——つまり、都市国家になされる貢献の、哲学的知識 (philosophical knowledge, des Wissens 知識) によるものと運動競技の優秀さ (athletic excellence, der Athletik 運動競技) によるものとの比較である。〈12〉イソクラテースは今や先輩の問いを繰り返す；しかし彼はポリスのことではなく⁽⁵⁾、ギリシアの共同社会 (the community of Greece, die Gemeinschaft aller Griechen 全ギリシア人の共同社会) のことを考えている。〈13〉彼のテーマは、その潜在的な全国民への価値 (its potential value to the whole nation, seinen Nutzen für die Gesamtheit その全体への利益) という点と同じほど、その文体上の表現の機会という点において偉大である (great, groß)：なぜかというと、彼はギリシア諸国家に相互に協和し夷敵と戦うほうがよいと勧めているのである。⁽⁶⁾ 〈14〉一人の本物の (true, echter) ギリシア人として、彼は自己を弁解したりせずに、自分たちは彼が進み出る必要はないくらい事柄 (the truth) をよく知っていると思っている、そういうすべての人々に挑んでいる：彼は自信を抱いているが、それは彼の主題の目新しさゆえにではなく、彼がそれを扱う完璧さゆえにである。〈15〉

⑤『イソクラテースはアテーナイの制海権の正当性を証明しようとし神話・伝説をも活用する』彼は主題のその核心、つまり実践的な問題を攻める。彼が話しているその頃は、彼の提案は、達成の見込みはまるでないように思われたであろう。最初の必要は、基礎を敷くことである。スパルターとアテーナイは仲直りしなければならない；そしてこれら、つまり二つの最強国、はギリシアのヘゲモニー (the hegemony, die Hegemonie) を分かちあわなければならない。⁽⁷⁾それが、イソクラテースが演説をとおして達成したいと思っていることである。〈16〉しかしたとえそれが不可能であるにしても、彼は少なくとも、だれがギリシア人の幸福の邪魔になっているのかを全世界にはっきり理解させたいと、そしてアテーナイの制海権 (naval supremacy, die Seeherrschaft) の要求の正当さ (the justice, gerechten) を最終的に (once and for all, einst und jetzt unwiderleglich 昔も今も反論の余地なく) 確証したいと、思っている。〈17〉というのは、それがほんとうの論争点なのである。彼はアテーナイの指導的地位 (leadership, die Herrschaft 支配権) の歴史を追うことに、その持続性を証明するように、またどんな指導的地位も時とともに所有主が変わるというあり得る異議の機先を制するように、とりかかると約束する。〈18〉アテーナイはヘゲモニーをもっとも早く獲得し、それに値するために、その残りのギリシアへの貢献によって一番行動した。〈19〉それはトゥーキュディデースにふさわしい主題であり、そしてその偉大な手本がなければ、イソクラテースはそれ [= (上述) 主題] を論じつくすことは、彼 [= トゥーキュディデース] がするように、ほとんどできなかったであろう。彼 [= トゥーキュディデース] のように、彼はアテーナイの業績を、ペルシアの侵略の間の、その [= アテーナイの] ギリシア人の統一の擁護において、⁽⁸⁾頂点化させる。しかしトゥーキュディデースは、アテーナイの支配力 (power, die Vormacht 主導的地位) を現在の十全な光のなかで見たのであった：彼はそれを、ギリシアの政治的展開の最近の段階に、つまりサラミスの戦闘⁽⁹⁾以来の比較的短い期間に、確立されたと思ったのである。〈20〉イソクラテ

スは、その代わりに、先史時代や伝説の時代にさかのぼるアテーナイの偉大さの画像 (a picture, ein Bild) を用いる。そこに彼は、彼がアテーナイをもう一度召喚しようとする指導力 (leadership) の誇りが、反映されているのを見る——母国で不当に迫害された政治亡命者の避難所として、貪欲な夷狄の来襲に対するギリシアの防壁として、また強大な僭主に脅かされる弱い国家の擁護者 (the protector, Helfer und Schützer 助力者であり保護者) として。事実、まさにこういうやりかたで、アテーナイはギリシア人の政治的生活における自らの役割を思い描いた。そのイデオロギーは、(近代の: in der Neuzeit) 英国の外交政策のそれ [= イデオロギー] に、そういったほかの何かよりも、似ている。あるいは、別の見地からすれば、この、アテーナイの現今の政治的願望によるアテーナイ初期の歴史の懐古的な解釈は、プロイセン (Prussia, Brandenburg-Preußens ブランデンブルク・プロイセン) 早期の歴史の、そのドイツ帝国におけるより最近の指導的地位 (leadership, Führerrolle 指導者としての役割) の見地からの、トライチュケ⁽¹⁰⁾の再解釈によるものにもっともよく対応され得る。しかし神話という疑似歴史的な (pseudo-historical, pseudo-historische) 過去は、歴史によく知られている後の時代よりも、より容易に‘心の願望に合わせて改造される’。いつの時代も、伝説 (legend, des Mythos 神話) という可塑的世界は、芸術家の手に合わせて形をとり彼自身の思想 (ideas, dessen Ideen) を表象化してきたのだった; そして今や、古い時代のアッティケーの英雄物語 (the sagas, Sage 伝説) が、歴史の夜明け前以来 (since before the dawn of history, von Urzeiten an 古代以来) アテーナイがギリシアの闘士であり解放者であるということを証明するために、雄弁術 (rhetoric, die Rhetorik) によって改造された (remodelled, die Umdeutung 新解釈) とき、それ [= (前文趣旨)] は絶え間のない詩的 (poetic, politischen 政治的) 変容における最終段階でしかなかった。その政治的伝説 (that political legend, dieser Staatsmythos 国家の神話) は、(前) 5 世紀におけるアテーナイの覇権 (supremacy, der Hegemonie) の高まりの間に、英雄的な死者の墳墓に関する公けの演説のなかで、また類似する折りに、早くも形をとった。イソクラテースがその [= アテーナイの] 覇権 (supremacy, Vormachtstellung 主導的立場) の再興を唱道する (preach, seinem Nachweis der Notwendigkeit 必然性の証明) ために進み出たとき、彼は伝説を自分の手の届くところにある道具であると理解した。⁽¹¹⁾ <21>

⑥『イソクラテースの国家主義的なイデオロギー——イソクラテースは全ギリシアにおけるアテーナイの知的、精神的な指導性の優位を絶対視する』このように(断固として: konsequenter)、アテーナイの全歴史的、伝説的過去を、その [= アテーナイの] ギリシアの指導という務めの漸進的な訓練 (schooling, Vorbereitung 準備) と理解することによって、イソクラテースはトゥーキュディデースに値する、そして実際に彼 [= トゥーキュディデース] によって使われた、主題を取り上げるが、しかしそれ [= 主題] を、トゥーキュディデースは決してしなかつただろうように、過去に置いてみる (projects it into the past, in die Vergangenheit zurückprojiziert 過去にさかのぼって投影する)。そうして彼 [= イソクラテース] は、同じことを、トゥーキュディデースの偉大な考えのもう一つのもの、つまり彼 [= トゥーキュディデース] がアテーナイのヘゲモニー (hegemony, Führerschaft 指導性) の理想 (ideal, Gedanken 考え) と非常に緊密に結びつけるもの——教養 (culture, Kultur) の創造者 (creatrix, Schöpferin)⁽¹²⁾としてのアテーナイの使

命——で（も：auch）する。トゥーキュディデースは、ペリクレスの葬送の辞で、^{《22》}その（対外的な：äußeren）力と壮麗さ（magnificence, Herrlichkeit）が絶頂にあるアテナイを、the *paideusis*、⁽¹³⁾つまり全ギリシアの学校（the school）として描いた。この見解は、ギリシア人の大義（the Hellenic cause, das Griechentum ギリシア的特質）への貢献の、その政治的なものと知的、精神的なものとを結びつける。トゥーキュディデースにおいてさえ、アテナイの知的な指導性（the spiritual leadership, die geistige Führerschaft）は、その（対外的な：äußeren）政治的支配の拡張の文字どおりの正当化である。^{《23》}しかしソクラテースは、（この点でも：auch hier）自分の手本を超えて進む。彼はアテナイの知的な使命（the intellectual mission, diese Kulturmission この文化の使命）を彼自身の時代（その時代では、それ [= 知的な使命] はまだ強く、かつ強さを増しつつあった）をはるかに遡り、さらにペリクレスの時代をはるかに遡り、太古のアテナイの伝説的時代（the legendary days, Sage）へと広げる（というやり方で：indem）。彼はこのようにして、この単一の平面（this one plane, diesen einen Ton この一つの色調）だけに基いて創造された、一つの静的な歴史像を創造する。この、教養（*paideia*, der *Paideia*）と全文明（civilization, Kultur 文化）の基礎としての農業、つまり人間が遊牧の民や未開人の野生的な野獣のような生活を初めて乗り越えることになる活動、との詭弁的な（sophistic, sophistischen）比較の、分かりやすい引喩を用いて、^{《24》}彼は自分の教養の歴史（his history of culture, seine Kulturgeschichte）を農耕の出現で始める。デーメーテルの放浪の伝説⁽¹⁴⁾は、それ [= 農耕] が、ミュステリア（秘儀）⁽¹⁵⁾の創設と関連して、エレウシース⁽¹⁶⁾に源を発しているということを断言していた。^{《25》}このように、人類の、定住した平和な生活と高度な道德律（moral code, Gesittung 礼節）への進歩は、宗教の、より高度でより個人的な形式（form, Form）の起源と関係づけられた——というのは、ミュステリアが、そのつよい倫理的な傾向とともに、（前）4世紀に特別な関心呼び起こしたのは、その見地（aspect）においてであった。^{《26》}そうして同時に、この伝説的な過去へ遡る旅をすることは、ソクラテースに、全教養（all culture, aller Kultur）の端緒をアッティケーの土壤にまで辿ることを許すのであり、そこにおいて（彼が考えるように）それ [= 全教養の端緒] は、後に、パイデア（*paideia*, *Paideia*）という形式において、その発展と精神的な力（spiritual power, Vergeistigung 精神化）の最高の段階に到達することになっていた。すべての国家的（national, nationalen）、文化的（cultural, kulturellen）神話は、同じようにして創られる——視野を狭くし、一つの特定の国家的達成を絶対的なものの頂点へと賞揚することによって。それ [= すべての国家的、文化的な神話] は、ありのままの科学的事実として真理だと判定されることよりも、むしろ信条（a creed, Glaubensartikel）として受け入れられることを予定している。それゆえに、それは歴史的な事実によって論駁されるものではない。それは、外国の国家や外国の文化（cultures, Verdienste 功績）の豊かな知識とまったく申し分なく両立させられ得る——ソクラテースがエジプトやフェニキア、あるいはバビュロンのことを何も知っていなかったと考えることはおそらく間違いであろう。彼の歴史哲学において、なかならず彼の伝説上の過去の解釈において、勝利を得たものは、アテナイの教養（culture, Kultur）の比類のない使命への確信である。ソクラテースの国家主義的なイデオロギー（nationalistic ideology, nationale Ideologie）（ここではアテナイが全文明（civilization, Kultur）の創始者とされる）は、

彼のパイデアーに潜む他のすべての考えとともに、後にその〔=イソクラテースの国家主義的なイデオロギーの〕 全体的な歴史観の一部として人文主義 (humanism, Humanisumus) によって引き継がれている。

(継続研究 (15) へ続く)

<注記と考察>

- (1) 2 節の節名は、本継続研究 (15) で確定する予定。
- (2) クセノパネース：前570年頃～前475年頃。ギリシアの詩人・哲学者で、「パルメニデースの師であったことからエレア学派の祖とされるが、体系的哲学者というよりも、伝統的な考えを鋭く批判した哲学的叙情詩人といえよう。」とされる。また「思惟によって宇宙を支配する唯一万能・不変不滅の非人格的な神の存在を説いた。当時流行の運動競技をも攻撃し、「知恵のある者の方が力のある者より優れているのだ」と断言」したという。さらにまた「山地から海生の貝の化石を、パロス島の大理石から月桂樹の葉の化石を発見し、これらを昔の生物の遺物であると推論したことでも注目される。」という。資料存在については、「現存するのは諷刺詩 *silloi*, σίλλοι とエレゲイア *elegeia*, ἐλεγεία (エレジー〈英〉elegy の語源) の断片だけでしかない。」という。(松原著)
- (3) παν-ήγυρις：祭りの集まり、国民的祭典。
- (4) ピュートー：デルポイの古名。
- (5) ドイツ語版ではここは、bei seinem Athlos (その苦難に際しては)、となっている。なお Athlos を、ἄθλος (苦難、試練) と理解しておく。
- (6) イェーガーは、イソクラテースが汎ギリシア主義の主題の大事さだけではなく、それを見事に述べることの重要性を述べている、と指摘している。
- (7) ここでの「分かちあう」は share (teilen) である。原文注記<16>を参照のこと。
- (8) ここはドイツ語版では、「ギリシアの統一の先頭を切って戦う者の役割において」となっている。
- (9) サラミースの海戦：前480年 9 月。
- (10) トライチュケ：Heinrich von Treitschke:1834-96. ドイツの歴史家。『岩波 哲学・思想事典』(1998年) の「トライチュケ」の項目の抜粋を下に記しておく。
 …権力的なドイツ国家を提唱する扇動的講義や反社会主義、反ユダヤ主義、帝国主義的拡張政策を唱える政論活動をおこなって、教養市民層に影響をあたえた。彼の未完の名著『19世紀ドイツ史』は、ドイツ史をプロイセンからみて、その行動を正当化する立場から書かれたもので、その国家中心の歴史観は後の新ランケ派に受け継がれた。彼の反ユダヤ主義は同僚からも批判を受けたが、その後の国粋主義運動に受け入れられ、「ユダヤ人はわれわれの災い」というトライチュケの言葉はナチスの有力なスローガンとなった。
- (11) イェーガーは、神話・伝説を自国の覇権を正当視する政治イデオロギーとして用いるという主観的・観念的傾向（これは近現代日本の社会・教育の問題でもある）を、ギリシア古典期のイソクラテースに見ているが、その歴史認識はトゥーキュディデースのそれと対比されるものである。なおイソクラテースに先んずる同様の事例としては、

本論文中的《原文注記》3. 21を参照のこと。またトゥーキュディデースの歴史認識としては、本論文中的《原文注記》3. 20. の〈注記と考察〉3. (18) におけるトゥーキュディデース『戦史』からの引用文を参照のこと。

- (12) ここの「創造者」は、ドイツ語も英語も女性形になっている。
- (13) παιδευσις (パイデウシス) : 「教えること、教育」「教養」「教育の手段・場」という意味があり、ここでは「教育の場」という意味合いになるだろう。
- (14) デーメーテル : ギリシアの穀物および豊穡を司る女神で、「母なる大地」の意をもっているという。イエーガーの叙述を理解するために、以下に松原著より一部を抜萃して引いておく。

…ゼウスとの間に娘ペルセポネー (コレー) を産み、エレウシースはじめギリシア各地において、通常ペルセポネーとともに「両女神」として祀られていた。冥界の王ハーデースに娘を連れ去られた時、デーメーテルは炬火を手に娘を求めて諸所を巡り、10日目に太陽神ヘリオスから真相を聞き出し、またこの誘拐にゼウスも合意していたことを知ると、憤怒のあまりオリュンポスを立ち去った。老女に身をやつした彼女は、地上をさすらいつつエレウシースに來り、王ケレオスの館で歓待され、その子デモポーンまたはトリプトレモスの乳母となる。ところが、幼児を不死身にするべく火の中に入れていたところを発見され、女神の本身を踏わして秘儀 (ミステーリア) を伝授、さらにトリプトレモスに穀物栽培法を教え、世界中に農耕技術を広めさせた。…

- (15) ミステーリア (秘儀) : ギリシアの密儀宗教で、「ミステーリアの単数形ミステーリオン *mysterion* (〈ラ〉ミステーリウム *mysterium*) から、後代の「神秘」「謎」「秘密」を意味する言葉、ミステリー (英) *mystery*, (仏) *mystère*, (独) *Mystery* 等が派生している。」ということである。以下に、イエーガーの叙述を理解するために、松原著より一部を抜萃しておく。

…古代を通じてとりわけ有名だったのは、アッティケー地方の豊穡儀礼に由来するエレウシースの秘儀 *Eleusinia Mysteria*, Ἐλευσίνια Μυστήρια で、これは歴代エウモルピダイ家出身の最高神官ヒエロパンテース *Hierophantes*, Ἱεροφάντης が、松明持ちや巫女ら大勢の補佐を得て執り行なう両女神デーメーテルとペルセポネーの祭事であった。アテーナイがエレウシースを併合した前7世紀以降、この秘教は特に盛んになり、前5世紀のペリクレス時代にはディオニューソスをもイアッコスの名のもとにとり入れ、汎ギリシア的な宗教へと大発展を遂げていった。毎年、春と秋に小・大のミステーリアが開かれ、アンテステーリオン *Anthesterion* 月 (今の2～3月) の小ミステーリアでは、イーリーソス *Ilisos* 河畔においてペルセポネーの冥界から地上への帰還が祝われ、ボエードロミオン *Boedromion* 月 (9～10月) の大ミステーリアでは、ペルセポネーが冥界へ攫われた故事を記念して、アテーナイとエレウシースで9日間にわたり盛大な祭典が営まれた。この折、アテーナイからエレウシースへ向かって「聖なる道 *hiera hodos*, ἱερὰ ὁδός」に荘嚴な行列が繰り広げられ、エレウシースに到着すると、神域内の聖殿テレステーリオン *Telesterion*, Τελεστήριον 内において入信者だけに秘儀が伝授された。…

- (16) エレウシース : アッティケー (アッティカ) の都市で、「アテーナイから18km北西の

海岸に位置し、エレウシース湾を隔てて南にサラミース島を臨む。」という。以下に、
 イェーガーの叙述を理解するために、松原著より一部を抜萃しておく。

…女神デーメーテル崇拜の最大の中心地で、彼女と娘 Kore ペルセポネーを祀る
 壮麗な神殿があり、ここで行なわれた密儀宗教「エレウシースの秘儀 Eleusinia
 Mysteria」によってあまりにも名高い。この秘教の起源はきわめて古く、ミュケー
 ナイ文化時代（前1600頃～前1200頃）以前に遡ると推定され、元来は王家の私的な
 祭儀に過ぎなかったようだが、前675年頃にエレウシースがアテーナイの支配下に
 置かれて以来、アテーナイの祝典エレウシース祭 Eleusinia, 'Ελευσίνια として国家
 宗教に組み込まれ、その後アテーナイの国力伸長とともに著しく発展を遂げた…。
 入信者には死後の安寧が約束されたため、老若男女、自由人・外国人・奴隷の別なく
 ギリシア文化圏全土から人々が参集し、いわば世界宗教として広く浸透したが、
 儀式の内容を口外することは死罪をもって厳禁されていたので、詳細は不明であ
 る。

《原文注記》2 イソクラテースの弁論術とその教養理念（その3）

80. 『パイデΙΑ II』, 150 p を参照。⁽¹⁰⁸⁾
81. 『ピリッポスに与う』 12. ⁽¹⁰⁹⁾
82. 『ヘレネー頌』 67. ⁽¹¹⁰⁾
83. 『ヘレネー頌』 66. ⁽¹¹¹⁾
84. この‘争論家たち’への攻撃は『ヘレネー頌』の序論 (introduction) 全体を占めてお
 り、弁論の (of the speech, der Schrift 論文の) 残りには何の関係もない。それゆえ、
 序論だけを論じることは、われわれの目的にとって十分であろう。アリストテレースは、
 前置き (the prooemium, das Prooemium) ⁽¹¹²⁾ の必要性は、演説的スピーチの (of an
 epideictic speech, gerade in der literarischen Gattung der epideiktischen Rede まさに演
 説的スピーチという文学的ジャンルにおいて) ⁽¹¹³⁾ 主要部分とは何の関係もない、と言
 い、イソクラテースの『ヘレネー頌』を例として引いている。彼は、賛辞 (encomium) の
 序論を横笛独奏にゆるやかに添えられた前奏曲 (prelude) (proaulion) ⁽¹¹⁴⁾ と比較してい
 る。(『弁論術』 3.14.1414.b26) ⁽¹¹⁵⁾
85. 『ヘレネー頌』 1.1. ⁽¹¹⁶⁾ イソクラテースの二人の名を隠した相手を見分けることは、実
 に容易い。アンティステネースに関しては、アリストテレースの『形而上学』第5巻
 29.1024b33, ⁽¹¹⁷⁾ を、それについてのアレクサンドロス (アプロディーシアスの) の注解
⁽¹¹⁸⁾ ととともに、またプラトーンに関しては『ソフィスト』 251b. ⁽¹¹⁹⁾ を参照のこと。
86. 『ヘレネー頌』 4. ⁽¹²⁰⁾
87. 『ヘレネー頌』 2-3. ⁽¹²¹⁾
88. 『ヘレネー頌』 5. ⁽¹²²⁾
89. 『ヘレネー頌』 6. ⁽¹²³⁾
90. 『ヘレネー頌』 7. ⁽¹²⁴⁾
91. 『ヘレネー頌』 8. ⁽¹²⁵⁾
92. 『ヘレネー頌』 9. ⁽¹²⁶⁾
93. 『パイデΙΑ』 II, 280とⅢ, 193を参照のこと。

《原文注記》3 政治的教養と汎ギリシアの理想

1. イソクラテース『民族祭典演説』4.⁽¹⁾；『ヘレネ頌』12-13,⁽²⁾『アンティドシス』3.⁽³⁾を参照のこと。
2. アISKYLOS『恵みの女神たち (エウメニデス)』980-987⁽⁴⁾
3. イソクラテースの時代以前の汎ギリシア主義の理想を説くためになされたすべての試みの概観を与える一冊の著書が必要である。多くの研究が、この問題の個々の角度に基づいてなされてきた。J.Kesslerの著 *Isokrates und die panhellenische Idee* (*Studien zur Geschichte und Kultur des Altertums*, vol.4, book3, Paderborn 1911) はイソクラテースその人のみを扱っている；彼 [= イソクラテース] の先行者たちは、G.Mathieuの *Les idées politiques d' Isocrate* (Paris 1925) でより十分に扱われている。
4. 『パイデシア』I, 323f.⁽⁵⁾
5. H.Dunkel, *Panhellenism in Greek Tragedy* (Chicago 1937). を参照のこと。
6. 『パイデシア』II, 251と255 f. を参照のこと。〔この原文注記は英訳版で加えられたものである〕
7. p.199を参照のこと。〔この原文注記は英訳版で加えられたものである〕
8. アリストテレス『政治学』7.7.1327b29-33.⁽⁶⁾
9. 『民族祭典演説』1.⁽⁷⁾
10. クセノパネースがオリンピック勝者のアレテー (すぐれていること) を、自分に体験されている賢者の知的な力と比較している、エレジー風の詩について、『パイデシア』I, 171-172を参照のこと。⁽⁸⁾
11. イソクラテースの自分自身の職業についての考えは、彼の提案に対するこの特別の聴衆の選択において表されたものとしては、もちろんゴルギアースと彼の『民族祭典演説』によって靈感を与えられている。知的なアレテーの代表者は、身体的なアレテーの最高の模範であるアスリートとの公開競技のなかに進み出、そして全ギリシア人を審判員、裁判官とみなす。イソクラテースの自分の使命についての後の見解における重大な変化が、『アンティドシス (財産交換)』1と『ピリッポスに与う』12に表れており——そこでは彼は自分の初期の民族祭典的な文体 (style, Beredsamkeit 雄弁) を放棄しているのであり、なぜならそれは、当代のギリシアでは効果的ではなかったであろう。『ピリッポスに与う』では彼は、全国民的な集会 (a national assembly) に向けてではなく、彼が全ギリシア人の未来の統治者を見出す一人の人物 (だけに: nur noch) に向けて演説している。⁽⁹⁾
12. クセノパネース、断片集、2.15-22⁽¹⁰⁾
13. 『民族祭典演説』2.⁽¹¹⁾
14. 『民族祭典演説』3.⁽¹²⁾
15. 『民族祭典演説』10-14.⁽¹³⁾
16. 『民族祭典演説』17. を参照。そこで彼は、スパルターとアテーナイのヘゲモニー (hegemony, der Hegemonie) の割り当て (the sharing, die Teilung) のことを述べるために、ισομοιρῆσαι と τὰς ἡγεμονίας διελέσθαι を使っている。これは、私たちが、ἀμφισβητεῖν τῆς ἡγεμονίας や τὴν ἡγεμονίαν ἀπολαβεῖν のような表現を理解しなければならない意味をもっている：それらは、アテーナイの制海権 (naval power, der Seeherrschaft) の回復を

暗に言っているのである。Kessler (*Isokrates und die panhellenische Idee* 9) は、イソクラテースは『民族祭典演説』においてアテーナイがギリシアの最高指導者 (supreme leader of Greece, die Alleinherrschaft Athens アテーナイの単独支配) となるべきだと提示している、と証明する試みに失敗している。⁽¹⁴⁾

17. 『民族祭典演説』 20. ⁽¹⁵⁾

18. 『民族祭典演説』 22. ⁽¹⁶⁾

19. このことは、アテーナイが残りのギリシアを支配する単独の権利を要求している、ということを示しているのではない。しかし、もしヘゲモニーに対する一つの国家の正当性が、歴史的な優先権ないしそれがギリシアにもたらした恩恵 (benefits, Wohltaten) に基礎を置いていざすれば、明らかにアテーナイはスパルターよりもその価値がある。『民族祭典演説』 23. 以降を参照のこと。⁽¹⁷⁾

20. トゥーキュディデース. 1.73-76を参照のこと。⁽¹⁸⁾

21. これは普通は、*epitaphoi* (碑文, der Epitaphien) ⁽¹⁹⁾ ないし葬送の辞 (funeral speeches) において採用される調子のもの (die Literaturgattung 文学のジャンル) である。当代の国家の統一と支配権の理想を証拠立てるための、太古の神話の新解釈のさらに早い時代の事例がある。それは、アッティケーを統一した王としてのテーセウス ⁽²⁰⁾ についての物語 (the sagas, Sageüberlieferung) の復活である——それら [= 物語] は最初にピシストラトス ⁽²¹⁾ の専制の間の6世紀の花瓶 (vases, den Vasenbildern 花瓶の絵) に再現し、それから詩文に流れ込む。この主題は、H.Herter によって *Rheinisches Museum* 1939,244f.,289f. においてきわめて詳しく論じられている。

22. トゥーキュディデース『戦史』 2.41.1. ⁽²²⁾

23. 『パイデア』 I ,407-408. ⁽²³⁾

24. 『パイデア』 I , 309. ⁽²⁴⁾

25. 『民族祭典演説』 28. ⁽²⁵⁾

26. 私の『アリストテレス』 p.160. を参照のこと。

<注記と考察> 2 イソクラテースの弁論術とその教養理念 (その3)

(108) 指摘されている箇所は、「6. *Gorgias: The Educator as Statesman*」である。[この原文注記は英訳版で加えられたものである]

(109) 『ピリッポスに与う』 12. は下記のとおりである (小池訳)。

しかしながら、私はすべてこれらの困難を度外視して、老齢を顧みず大望を抱いた。貴下 [= マケドニア王ピリッポス2世] に宛てて論弁すると同時に、私の弟子に対し模範を示し、以下のことを明らかにしようと思ったのである。すなわち、民族祭典において喝采を博し、群がり集った聴衆に向かって語りかけることは、無人の野で語るにひとしく、そのような弁論はソフィストの著わした法律や国制論と同様に実効がないものであること。

上記の文章の「ソフィストの著わした法律や国制論」に、訳者は訳注として次のように記している。

アンティステネスに『法について、あるいは国家について』の著作があった (ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第七巻16)。またイソクラテス

この著述の前年には、プラトンが世を去ったが、その『法律』原稿をオプスのピリッポスが筆写したという(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第三卷37)から、この当時評判になっていたかもしれない。他にこの部門の著述をした人は、カルケドンのパレアス、ミレトスのヒッポダモスなどの名が伝えられている。

- (110)『ヘレネー頌』67. は下記のとおりである(小池訳)。

語り残されたものは、語られたものよりもはるかに多い。技術と哲学とその他有用なものには、ヘレネとトロイア戦争に帰すことのできるものがあるが、それを措いても、われわれは異民族への隷従を断ち切った原因は、ヘレネにあると認めて正当であろう。なぜなら、ギリシア人が彼女ゆえに心を一つにして、こぞって異民族の征服に向けて出兵し、はじめてそのときヨーロッパがアジアを降した戦勝碑を打ち建てたことをわれわれは知るであろうから。

- (111)『ヘレネー頌』66. は、下記のとおりである(小池訳)。

このように信賞必罰の神であるのだから、財貨に富める者は奉納物や犠牲やその他の祭礼によって彼女を宥め崇敬すべきであり、哲学する者は彼女について彼女の属性に釣り合った言葉を綴らなければならない。教養ある人(πεπαιδευμένοις, men of cultivation)にはそのような最初の捧げ物をすることがふさわしいからである。

- (112) das Prooemium は「(古代の著述などの)前置き、序言」で、προ-οίμιονには「前置き、序、序論」などの意味がある。

- (113) ἐπί-δειξις: 「実用のためではなく専ら聴かせるためだけの美辞麗句を連ねた演説」
「演説」

- (114) προ-αὐλιον: 笛の前奏

- (115) アリストテレス『弁論術』の該当箇所を、以下に(やや長く)引いておく(『アリストテレス全集16』岩波書店、1968年、に拠る)。「この原文注記の訳文の「イソクラテースの『ヘレネー頌』を例として引いている。」以下は、英訳で補充されたものである」

ところで序論は弁論の初めであって、ちょうど詩における前口上や笛吹きにおける前奏に当たる。というのはそれらはすべて初めであって、そして後に続くものの道ならしのようなものだからである。さて前奏は演示的弁論の序論と同じような性質のものである。というのは笛の吹き手は何でも自分の上手に吹くことのできるものを、前に吹いて、これをキー・ノートに結びつけるが、演示的弁論においてもやはり人はそういう風にならなければならないからである。すなわち何でも彼の欲するものを述べるや否や、[キー・ノートに当たる]演説の要旨を述べて、それに結びつけなければならないからである、これはちょうどすべての人々がやっていることである。その例はイソクラテースの『ヘレネ』の序論。というのは[その序論で論じられる]争論家たちと[主題たる]ヘレネとの間には何らの共通点も存しないからである。しかしそのように違った領域に移っていくなら、その弁論全体が同種類でないことになって、そのことが同時にまたこの弁論の種類に適するのである。しかし演示的弁論の序論は称賛、あるいは非難から作られる(例えばゴルギアスが彼の『オリュムピア演説』で「多くの人々によって驚嘆されるにふさわしい諸君、へ

ルラスの人々よ」と言っているようなもの。すなわち彼は民族大祭典を最初に催した人たちを賞賛するのである。…）、…

- (116)『ヘレネー頌』1.1. は下記のとおりである (小池訳)。

奇抜で意表をつく主題を思いついて、何とか聴くにたえる話が展開できれば、おおいに得意になる人びとがいる。老齡を迎えてなおかつ、あるいは「虚偽も反論もまた同じ事柄についての両論も不可能である」と主張し、あるいは「勇氣も知恵も正義も同じ一つのことである」と論じて、本来われわれは、それらのどれも別に単独にもつものでなく、そのすべてにわたる知識は一つであると詳細に弁じ、またあるいは周囲の者を煩わすだけの無益な論争にうつつを抜かしている。

- (117) アリストテレスの『形而上学』第5巻29.1024b33は、その前後を含めて確認すると、下記のとおりである (『アリストテレス全集12』岩波書店、1968年)。

…ところで、それぞれの物事についての立言は、ある意味では一つきりである、すなわちその物事の本質を言い表す立言〔説明方式〕あるのみである。しかし他の意味では、立言は一つより多くありうる、というのは、物事それ自らも、限定の加わった物事も、たとえばんに「ソクラテス」というのも、「教養的なソクラテス」というのも、或る意味では同じものだからである。——ただし、偽なる立言は、厳密な意味では、なにもものの説明方式でもない。——だからして、アンティステネスが、なにものもただそれ独自の言葉でしか言い表されえないと考え、一つ〔の主語〕には一つ〔の術語〕あるのみと言ったりなどしたのは、全く単純幼稚と言うべきである。だからまたそこから、矛盾したことは言えないとしたり、あるいはほとんど全く偽であること〔偽なる立言をすること〕は不可能であるとするかのような結論も導出されたのである。しかし、それぞれの物事は、それ固有の説明方式で言い表わされうるのみでなく、或る他のものの説明方式で言い表わすこともできないのではない。ただしこの場合には、全く偽的に〔誤って〕定義されもするが、真実に定義されることもありうる、たとえば、二という概念を用いて八を或る倍数であると定義しうるがごときである。

- (118) アレクサンドロス (アプロディーシアスの) : 後2世紀末～3世紀初頭に活躍。ギリシアのペリパトス (逍遙) 学派に属する哲学者で、「古代で最も有名有能なアリストテレスの注釈家」で、「…私意をはさまずアリストテレスの諸作品に注解を施し、後代の研究家を大いに益した点で高く評価される。『形而上学』『トピカ』『気象論』などアリストテレスの5作品の注釈の他、『靈魂論 Peri Psykhes』『運命論 Peri Heimarmenes』といった独自の著作もいくつか現存する。」という。(松原著)

- (119) プラトーン『ソフィスト』251b. は、下記のとおりである (『プラトン全集3』岩波書店、1976年、に拠る)。

エレアからの客人 われわれは、ある人間のことを語るのに、いろいろと多くの言い方でその人を呼ぶはずだ——色のことや、姿形のことや、大きさのことや、悪徳や徳のことなどをその人について、付け加えて語ることによってね。いま挙げたものすべての場合、また他の無数の場合において、われわれは、その人が「人間」であるとだけ言うのではなく、さらに「善い」とも言うし、ほかにも数かぎりないいろいろなものでありうるというわけだ。そしてその他のものについても同じことで

あって、われわれはそれぞれのものを一つのものと前提しておきながら、こんどは逆にそれを多くのものとして語り、多くの名前によって語るのだ。

(120)『ヘレネー頌』4. は下記のとおりでである (小池訳)。

…しかしながら、どのような主題についても偽りの論を組み立てることなどは、造作もないということが先人によってこれほど赤裸々にされたにもかかわらず、彼らは旧態然と月並みの話題に耽溺している。そのようなからくりは口舌の領域では反駁に成功しているかのごとく装えても、行為の場面ではすでに長い時間にわたって反駁されている。彼らはかかる詐術を放棄して、真実の追求に励むべきであり、…

(121)『ヘレネー頌』2-3. は、下記のとおりでである (小池訳)。

2 私としても、このようなたわごとの類いが最近生まれた現象であって彼らはただ発想の新奇を追うものであると見ていたならば、これほどに彼らに驚きはしなかっただろう。しかし実のところは、いかに物忘れがひどくとも、プロタゴラスや彼と同時代のソフィストがそれとよく似た、またそれよりもさらに困惑させられる書き物を残していることを知らない人はいない。

3 たとえば、臆面もなく「存在するものは何もない」と論じたゴルギアス、「同じことが可能でありまた不可能である」と証明を試みたゼノン、自然に生じた事物は無数にあるのに「万物は一つである」という論証を発見しようとしたメリッソス、誰がこの点で彼らの上を行くことができようか。

(122)『ヘレネー頌』5. は、下記のとおりでである (小池訳)。

すぐれた政治を実現する実践行為に門弟を教育し訓練しなければならない。有用な問題について適正な判断をもつことのほうが無用の業について厳密な知識を磨くことよりも、また重大な事柄においてわずかでも先行することのほうが何ら人生を益さない枝葉末節に抜きん出ることよりも、はるかにまさると心得なければならない。

(123)『ヘレネー頌』6. は、下記のとおりでである (小池訳)。

しかし実のところ、彼らは若者を相手の金稼ぎにしか関心がない。もっぱら論争に関わる哲学は、これを最も効果的になしとげるものにすぎない。なぜなら、私人の生活にも公的な課題についても何ら思案をめぐらすことなく、よりもよっておよそ何ものにも役立たない議論を喜ぶものだからである。

(124)『ヘレネー頌』7. は、下記のとおりでである (小池訳)。

たしかに、年端もいかぬ者たちならば、そのような考えに染まっても多めに見てしかるべきであろう。世事万般において、年少者は常軌を逸した驚異的なものを見て喜ぶのが常だからである。しかし教育を授けると称する人びとは非難を免れない。一方で私的な契約をめぐる係争で欺く者や不正に言論をもてあそぶ者を糾弾しながら、自らはその者たちよりも恐るべきことをしている。後者が他人に損害を与えているだけであるのに対して、彼らは親しい門弟をことのほかに毒しているからである。

(125)『ヘレネー頌』8. は、下記のとおりでである (小池訳)。

しかるに、彼らは著しく虚言の技術を進歩させ、その結果いまや、彼らがこのような仕事によって利を得ているのを見て、「乞食や亡命者の生のほうが、ほかのどん

な生よりも羨むべきものである」と平気で書きあらわす者、また「もし劣悪な事象について何事か言うことができれば、いわんやまして立派ですぐれた問題について滔々と論じる材料に困ることはない」という屁理屈を証明に使う者さえ現れている。

(126)『ヘレネー頌』9. は下記のとおりである (小池訳)。

何よりも噴飯物と思うのは、このような論法で説得を試みて、みずから喧伝している領域で弁舌の披露ができるのだから、自分らには政治を扱う知識もあるとわれわれに信じさせようとしていることである。しかし、思慮のありようについて自説を立て、知者の名を自称する人ならば、誰も相手にしない狭い領域においてではなく、すべての人が一家言をもっている主題でこそ頭角を現わし、素人 (τῶν ἰδιωτῶν, laymen) を超えるのが至当ではないか。

<注記と考察> 3 政治的教養と汎ギリシアの理想

(1)『民族祭典演説』4. は下記のとおりである (小池訳)。

ひそかに心に帰すところは、彼らをはるかに凌いで、この論題について話されるのを聴くのはいまはじめてのことであるかのように世に印象づけることにあり、また同時に最も美しい言論とは、最も重大な問題を扱い、弁論家の栄誉を最高に輝かし、聴衆をして最大に益するものこそがそれであると、かねて思い定めていたからである。

(2)『ヘレネー頌』12-13は下記のとおりである (小池訳)。

12 その最大の証として、蜂や塩その他を讃えようとする人の誰も、かつて言葉に窮したことがないのに対して、一般に善もしくは美とみなされているもの、また徳の点での卓越について述べようとすれば、誰もが事柄そのものと比べて見劣りする語り方しかできない。13 けだし、これらのそれぞれについての的確に語るということは同日の談ではなく、一方の主題は弁論でこれをしのぐのは容易だが、他方の偉大さに言葉をもって肉薄することは至難である。名高い題材について先人の誰もが語らなかったことは稀であるが、卑俗な話題は何を口にしてもすべてが独創となる。

(3)『アンティドシス』3. は下記のとおりである (小池訳)。

所詮はたわごとにすぎない、何ほどの影響力があろうか、対してわが業績は世に赫々たるものではないか、論説を著わすにあたって、題材を私人の契約をめぐる訴訟に取らず、その規模の大きさと重要性において比肩するもののない主題を選んだこと、そしてこれは私の門人とその模倣者のほかに誰ひとり企てようとしなかったこと、これは衆目の認めることだと考えていたからである。

(4)アイスキュロス『恵みの女神たち (エウメニデス)』の980-987は、最終場面でのコロスの歌で下記のとおりである (『ギリシア悲劇全集 1』岩波書店、1990年、に拠る)。

コロス わざわいに飽くことを知らない

あの「内乱」の神が、この町で

叫び声をあげることをないようにと祈り上げよう。

町びとの黒い血を吸ったばかりに、土くれがまた、

その怒りに駆られて、
ついには町の「破滅」にいたる
殺しには殺しの報復を食ることのないようにと。
代わりに人々は、心を共にした目的をめざして、
喜びをかわしあい、
敵には同じ一つ心で憎しみを向けるようにと。
これこそが、世の無数のわざわいを癒す薬であるのだから。

なお、訳者である橋本隆夫は、この「殺しは殺しの報復を食ることのないようにと。」という箇所、次のような訳者注を記している。

この句は「オレスティア」三部作の結末を飾る言葉として注目すべきであろう。内乱もまた私怨の発展したものである。一族の私怨も解消し、市民同士の争いも収拾された後の、平和と正義が讃えられる。

- (5) 指示されている『パイディア』 I. の該当叙述のなかでは、アンティポーンの小論 *Truth* (『真理について』) のことが、「その少なからぬ断片が最近エジプトで発見された」(p.327) ということで、指摘されている。なおその原文注記は下記のとおりである。

Pap. Oxyrh.1364 (Hunt) :now published in Diels, *Vorsokratiker* II (5th ed.), 346ff.,frg. B44,col.2.10ff.

その『真理について』の「断片A」における「法の掟は人為的なものであるが、自然の掟は必然だからである。」ということの展開内容は、ソポクレースの『アンティゴネー』やトゥーキュディデースの『戦史』の思想を想起させるものである。このことについては下記の拙論を参照されたい。

- ・「ヒューマニティの思想の現代性について——ギリシア的パイディア（教養）の再生を考える——」（教育科学研究会編集『教育』2008年2月号所収）
- ・「「人間性の開花」と表現・文化活動——ヒューマニティの意識化とその継承に学ぶ」（『月刊社会教育』2009年2月号所収）

アンティポーンの上記主題は、さらには、J.J.ルソー『エミール』の冒頭の、「社会秩序のもと」と「自然の秩序のもと」との対比を想起させる。

さてイェーガーが本文で指摘する『真理について』の直接的な箇所は、「44 断片B」の次の部分と判断される（『ソクラテス以前哲学者断片集 第V分冊』岩波書店、1997年、に拠る）。

…立派な祖先をもつ人びとをわれわれは尊敬し、畏怖するが、立派でない家のある人たちは尊敬することもなければ、畏怖することもない。しかしこの点においてわれわれは、お互いに対して野蛮人のようになっている。というのも、現に自然においてはあらゆる点に関して、野蛮人であれ、ギリシア人であれ、われわれはだれもみな同じように生まれついているからである。つまり考察すべきは、自然においてすべての人間にとって必然的であるようなものごとなのである。これらはだれにとっても同じ仕方では確保されうるものであり、またすべてこうしたものにおいては、野蛮人であってもギリシア人であっても、だれかがわれわれと区別されるというようなことはけっしてない。なぜならば、われわれは皆、口と鼻で空気を吸い、そしてだれもが手を使ってものを食べるからである。

- (6) 指示されているアリストテレス『政治学』7.7.1327b29-33. は、前後をやや広げて確認すると下記のとおりである（山本光雄訳、岩波文庫、1961年、に拠る）。

ところで、これはギリシア人たちの有名な国に注目し、また人の住む世界の全体が民族によってどんな風に分割されているかに注目すれば、だいたい、わかるだろう。すなわち寒い地方にいる民族、特にヨーロッパの民族は気概には富んでいるが、思慮と技術とにやや欠けるところがある、それゆえ比較的に自由を保ちつつけているが、国的組織をもたず、隣人たちを支配することが出来ない。しかるにアジアの民族はその魂が思慮的でまた技術的ではあるが、気概がない、それゆえ絶えず支配され、隷属している。しかしギリシア人の民族はその住む場所が中間を占めているように、その両方に与かっている、というのは実際気概があり思慮があるからである。それゆえ自由（ἐλευθερόν, free）を保ちつつけ、非常に優れた国的組織（βέλτιστα πολιτευόμενον, very good political institutions）を持ちつつけている。そうしてこの種族はもし一つの（μᾶς, unity）国制を定め〔て統一を成し遂げ〕たなら、他の凡ての民族を支配することが出来るだろう。しかしギリシア人のいろいろの民族もお互いの間では以上と同一の相違をもっている。すなわち、或る民族はその本性が一面的である、しかし或るものはその両方の能力が巧く混合されている。

- (7)『民族祭典演説』1は下記のとおりである（小池訳）。

幾度となく私は、はじめて民族祭典を招集し競技会を開設した人びとに驚きを禁じえなかった。彼らは、肉体の成し遂げた業績にはかくも大いなる贈り物を至当としながら、ひるがえって市井において公共のために腐心し、またその精神を涵養して世に益する力をもつまでに至った人びとには、何の榮譽も分かとうともしない。

- (8) イェーガーはクセノパネースに関して『バイディア』I, 171-172を指示しているが、171-175が該当すると判断される。

- (9)『アンティドシス（財産交換）』1は下記のとおりである（小池訳）。

これから読み上げられる論説が、法廷で黑白を争う弁論や、弁士の力量を誇示する演説と同工異曲のものであったなら、私も本論の前に釈明をつけたりはしなかったであろう。しかるにここで、前代未聞の様式を採用するからには、まずその事由を述べておかねばならない。何ゆえに、かくも異例の著述にとりかかったのか。それを明らかにしなくては、おそらくこの弁論は大方の人に、場所柄をわきまえない奇矯なものと思われるであろう。

- 『ピリッポスに与う』12は下記のとおりである（小池訳）。

しかしながら、私はすべてこれらの困難を度外視して、老齢を顧みず大望を抱いた。貴下に宛てて論弁すると同時に、私の弟子に対し模範を示し、以下のことを明らかにしようと思ったのである。すなわち、民族祭典において喝采を博し、群がり集った聴衆に向かって語りかけることは、無人の野で語るにひとしく、そのような弁論はソフィストの著わした法律や国制論と同様に実効がないものであること。

- (10) 指示されているクセノパネースの断片を少し手前から引くと次のようである（『ソクラテス以前哲学者断片集 別冊』岩波書店、1998年、に拠る）。

馬たちのおかげで勝ってさえ すべてこれらを手に入れるのだ――

この私とくらべれば そんな恩恵をうける値打ちはすこしもありはしないのに！

なぜなら私のもつ知恵こそは 人や馬の体力よりもまさるものなのだから。
それなのに まことにいわれなき人の世のならわし、
すぐれた知恵より体力を尊ぶのは 正しいことではない。
たとえ人びとの間に すぐれた拳闘家がいたとしても
さらには脚のひときわ速い人がいたとしても (これこそは競技における男たちの力
業の中でも とくに尊ばれるもの)、
だからといって 国がそれだけよく治まるわけでもあるまいに、
だれかがピサの岸辺で、競技に勝ったからといって、
そのために国が受ける恩恵は ほんのわずかな取るにたらぬもの、
そんなことのために国の宝庫が肥るわけではないのだから。

(11)『民族祭典演説』 2. は下記のとおりである (小池訳)。

けだし、彼らはこの人びとをこそ厚く遇してしかるべきではないか。なぜなら、競技者がおのおの体力を二倍にして東になったところで他を裨益するところが増大するわけではないが、思慮に秀でた人はただ一人現われるだけで、その精神のはたらしに与ろうとする人のすべてが益を受けるからである。

なお訳者はここに、「同工の対比は、エウリピデス『アウトリュコス』断片282 (Nauck)にある。古くはクセノパノス『断片』19 (DK) を参照。」と注記している。

(12)『民族祭典演説』 3. は下記のとおりである (小池訳)。

さりながら、私はかかる現状に落胆して拱手傍観するものではない。むしろ褒賞は、この演説がもたらすであろう名声で十分に満足し、外敵に対する戦争とわれわれ内部の協和について勧告するために、ここへ来たのである。もとより、すでに知者を自認する多くの者がこの主題に挑んだことは承知の上であって、…

(13) イェーガーは『民族祭典演説』 10-14. を指示しているが、その中の10,11を下記に引いておく (小池訳)。

10. 案ずるに、他の技術一般にも言えることであるが、もしひとの驚嘆と尊敬がその仕事の創始者にではなく、最もよくそのつどの作品を仕上げた者に向かうならば、言論の研究は長足の進歩を遂げるにちがいない。すなわち、前人の誰も取り上げなかった新奇な題材を求めて語ろうとする者ではなく、余人の及ばぬ語り方を会得した者こそがもてはやされてしかるべきなのである。

11. とはいえ、世上には常人の域を超えた言論に気色ばみ、彫琢をつくした緻密な議論を厭う者はいるし、また途方もない勘違いをする者も現われて、遠大な企図のもとに構想された言論を民事訴訟の弁論と比較して、その本領が単純明快と崇高壮大の違いがあることを無視して、あたかも両者が同じように語られなければならないかのようにみなし、あるいはおのれ一人が中庸を洞見していると自惚れて、厳密な語り方を会得している者はまるで素直に話すことができない者であるかに思っている。

(14)『民族祭典演説』 17. は下記のとおりである (小池訳)。

しかし、弁論の力量を披露するだけで事足りるとせず、政治目標の実現を図ろうとする者は、これら二大国家を説得し、互いに等分の権利を認めて指導の責任を分かちあうよう促し、またいまギリシア同胞から奪ってわがものとしようとしている利

得は、外敵からこれを取るようには勧めなければならない。

なお *ισομοιρία* は「同じ分け前」「共有」という意味をもつ。

- (15)『民族祭典演説』20. は下記のとおりである (小池訳)。

またもしこの目的が遂げられなくとも、ギリシアの栄耀を妨げる者が誰かを白日のもとにさらし、これによって以前にわれらの国家が海上制覇していたのは正当であり、また現在も主導権を主張するのは正義にもとるものではないことを誰の眼にも明らかにしたい。

- (16)『民族祭典演説』22. は下記のとおりである (小池訳)。

他方また、もしこの判定を不服とし、有為転変は世の常であって至高の権力もけっして同じ者のもとにとどまるものではなく、主導権であろうとその他の褒賞と同じように、この栄誉を獲得する資格は第一人者にある、もしくはギリシアのために最も多くの善に貢献した者にあると主張するならば、かえってわれらに与するものであると私は考える。

- (17)『民族祭典演説』の23. 以降で、アテナイの海上主導権の、その正当性の歴史的根拠が縷々述べられていくが、ここでは23. のみを以下に確認しておく (小池訳)。

なぜなら、これらいずれの資格についても、遠く過去にさかのぼって検討を進めれば進めるほど、反対者の声は小さくなるからである。実際、わが国家が最も古い起源にさかのぼること、また最も偉大で、この世で最も名高いものであることは、ひろく認められている。主張の基礎がこれほど堂々たるものであるからして、これに続く論点に拠って立てば、われらの尊重されてしかるべきことはいっそう明白なものとなろう。

- (18)トゥーキュディデース『戦史』1.73-76は、ラケダイモン (スパルター) において開かれていたペロポネネーソス同盟の非公式会議が舞台であり、たまたま他の用談のためにラケダイモンに来ていたアテナイから使節の者がその会議に赴き発言することを求め、許された一人が演説する、という場面である。イェーガーの説明を理解するために、その演説の〔73〕の後段より、〔74〕〔75〕を下に引いておく (久保正彰訳、岩波文庫 (上)、1966年、に拠る)。

〔73〕「…あわせて、われらに対して浴せられた論旨の一般的な傾向にかんがみて、一つ、われらは正当な理由によって今日の所有をなしたこと、一つ、われらのポリスは史上故ある実績を有すること、これを説明いたしたい。

「太古に遡る事績については、証拠としては唯伝承のみで、諸君の実見にうったえることはできぬから、省略をゆるされたい。下ってペルシア戦争さらには諸君自らが参加した諸事件に関しては、すでに折あるたびに引用されており、重畳するおそれもあるが、いま一度言及しなくてはならない。なぜならば、われらはペルシア来寇のとき、諸君を救うため危険をかえりみず敢然と立ち、諸君はわが事績の余沢をさずかった。しかるにその栄光がわれらに益を授けんとすればこれをことごとくわれらから奪うのは、当を欠く処置と信ずるからである。しこうして、われらがこれに言及するのは口実を乞うためではなく、もっぱらこの事績を証拠とし論証のよすがとして、われらのポリスの真価を示し、愚かしくもこれを相手に争うことのないように、諸君の熟慮を促すためである。敢てわれらは主張する、われらは孤軍マ

ラトーンの野に兵を進め、ペルシア勢と戦う危険をも辞さなかった。再度来寇の時には、陸上部隊によって撃破するには兵数が足りず、全兵員を動員して軍船に乗り、力をあわせてサラミスの海戦を敢行した。これによって、おびたしい数の敵船襲来に対して相互援助の対策すらないペロポネーソスを守り、敵船隊がしらみ潰しにペロポネーソスの諸都市を破壊する禍を未然にたつた。この主張を支える最大の論証は、クセルクセス自身がのこしていった。海戦に敗れると、はや彼我の勢力は匹敵せずとして、かれは急遽遠征軍の過半を率いて撤退したのだ。

[74]「ともあれ大戦はこのようにして終結し、ギリシアの存立は海軍によって全うされたことが、真実疑いなく示された。この成果を得るためにわれらは三大貢献をなした。最大数の軍船、最鋭敏なる指揮者、最果敢なる勇気だ。船については総数400艘に成なんとするうちの三分の二をわれらが占め、その指揮者テミストクレスは海峡での海戦計画の発案者、かれこそ疑いなくギリシアを救った殊勲者であり、諸君もこれを認め、ラケダイモンを訪れる諸邦の人々の中でもとりわけ高い栄誉をかれに与えた。またわれらが示した勇気は何びとの比肩もゆるさぬ果敢さであった。一兵の陸兵も加勢に現れず、またわれらの隣国にいたるまでことごとくペルシアの輓に甘んずるのを見て、われらのみは己れの家を犠牲にしポリスを棄てることを潔しとした。だがあとに残った同盟全体の誼をわが手で破るまい、四散して味方の足手まといになるまいと、わが軍船に生命を託し、諸君が一兵の助けもわれらに与えなかったことに毫も心を曇らせなかった。さればわれらはいうのだ、われらは救われたのではない、われらは諸君を救ったのだ、と。いわば諸君はわれらの安否よりも己の安否を気づかったから、人住みさかえる故郷の町から後生大事に、遠い救いの手をさしのべた（じじつ、われらが無傷のあいだには援兵を送らなかったではないか）。われらははや面影もない故郷を出陣し、復旧の望みすらなきにひとしい祖国のために、生命を賭して諸君らの多くを救い、われら自身をも救った。若しわれらが、他の諸国の輓をふみ、所領の安全を願ってペルシアにすすんで同調していたならば、あるいは易々と敗戦に甘んじて海戦に生命をかける勇気を欠いていたならば、ギリシアはどうなっていたらうか。充分な海軍もない諸君が海戦をおこなうはずがない、ただなすことなく、ペルシアの意のままにギリシアの運命をゆだねていたに相違ない。

[75]「われらはあえて問う、ラケダイモンの諸君、われらは当時の勇気と明敏なる判断によって支配圏をさずかっている。いったい何のいわれがあって、他のギリシア人諸君はわれらの支配圏にたいしてかくも激しい嫉妬を抱いているのか。じじつまたこの支配圏とても、不正な暴力によって獲得したものではない。諸君がペルシア戦争の続行に参加を拒否したので、同盟者らがわれらに近づき、盟主の地位に立つことをかれらの方から要請したのだ。この事実を起点として最初は止むなく同盟維持を押しすすめ今日にいたつた。もとより初めはペルシアの脅威が主因であったが、やがては名誉心、さらには利得心もこれに加わった。そして遂には大多数の者らの憎悪を買うにいたり、同盟内の叛乱と懲罰さえも幾度か生じ、諸君ともはや旧の如き友ではなく、ただ猜疑と紛争のみの仲となって、同盟諸国への圧力をゆるめることは、すでに自国の安全を危うくするにひとしい事態にたちいたつた。こと

に同盟離反者は、諸君の被護を求めようとしたからだ。しかし存亡の重大事に直面して己れの利益を守るために意を用いて、なにのはばかりがあらうか。

(19) the epitaphoi (der Epitaphien) : ἐπι-τάφιος は「墓・葬式にかんする」「追悼の」という意味をもつ。

(20) テーセウス：ギリシア神話における国民的英雄で、松原著の「テーセウス」より一部を抜粋して見ておくと次のようである。

テーセウスの伝説は、ドーリス人の英雄ヘーラクレースに対抗して形成され、アテーナイの国威発揚につれて次第に発達していった。とりわけペルシア戦争中、マラトーンの闘い（前490）に彼の亡霊がギリシア軍の先頭に現れて敵を撃破したと取り沙汰されて以来、その崇拜熱は急速に昂まり、デルポイの神託（前476年）に従って前469年には將軍キモーンの手で遺骨がアテーナイ市内にもたらされ、神殿テーセイオン Theseion（〈ラ〉Theseum）が建立され（…中略…）、さらにはテーセイア Theseia 祭が祝われるに至った。美術作品においてテーセウスはひげの無い逞しい青年の姿で表われ、特にアマゾンたちやケンタウロイとの戦闘の場面が文芸の主題として広く愛好された。

(21) ピシストラトス：前605- 前527。アテーナイの僭主で Hipparchus と Hippias の父。

(22) トゥーキュディデース『戦史』2.41.1. は、有名な、「今次大戦の最初の戦没者たちの国葬」におけるペリクレーズの葬送の辞の一部である。指示された箇所をやや多めに見ておくと、下記のとおりである（久保正彰訳、岩波文庫（上）、に拠る）。

[41] 「まとめて言えば、われらのポリス全体は（πᾶσαν πόλιν, our city as a whole）ギリシアが追うべき理想の顕現（τῆς Ἑλλάδος παιδευσιν, the school of Hellas）であり、われら一人一人の市民は、人生の広い諸活動に通曉し、自由人の品位を持し、己れの知性の円熟を期することができると思う。そしてこれがたんなるこの場の高言ではなく、事実をふまえた真実である証拠は、かくの如き人間の力によってわれらが築いたポリスの力が遺憾なく示している。なぜならば、列強の中でただわれらのポリスのみが試練に直面して名声を凌ぐ成果をかちえ、ただわれらのポリスに対してのみは敗退した敵すらも畏怖をつよくして恨みをのこさず、従う属国も盟主の徳をみとめて非難をならさない。かくも偉大な証績をもってわが国力を衆目に明らかにしたわれらは、今日の世界のみならず、遠き末世にいたるまで世人の賞嘆のまとなるだろう。…（以下略）…

なお文中に挿入したギリシア語のなかで、παιδευσις は「教えること、教育」「教養」「教育の手段・場」という意味をもち、該当箇所は（イエーガーの論述にも照らし合わせると）「ギリシアの教育の場（学校）」という意味になるだろう（久保訳「ギリシアが追うべき理想の顕現」はその意識だと思われる）。

(23) 『パイデア』I, 407-408. は、第I巻第2編「アテーナイの精神」の「6. トゥーキュディデース：政治哲学者」のパートである。

(24) 『パイデア』I, 309. は第I巻第2編「アテーナイの精神」の「3 ソフィストたち」のなかの「教育理論の源と教養の理念」のパートである。

(25) 『民族祭典演説』28. は下記のとおりである（小池訳）。

28 第一に挙げるべきは、人間の生れついた本性が最初に必要とするものが、わが

国を通して準備されたことである。この話は伝説にすぎないとしても、いまここで言及するにふさわしい。さて、デメテルは誘拐されたコレーを捜し求めて世界を放浪していたとき、この地にたどり着き、そこでわれらの祖先の奉仕を（これがどんなものであったかは、秘儀入信者のほかは聴くことを許されていないが）喜んで、最大の恵みとなる二つの贈り物をしたという。一つは穀物であって、これによりわれわれは野獣のような生活を断つことができたのである。またもう一つは秘儀で、これに参与する者は生の終わりと永遠に関して甘美な希望を授かるのである。

Ⅳ. 現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート⑧

～継続研究 (14) における～

〔Ⅳ. の趣旨について：イェーガーは『パイディア』第1巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている（本継続研究 (3)、Ⅱ. 第1章<訳文①>）。イェーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されてのものであり、『パイディア』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイディア』研究の一環として記してみようと思う。〕

1) 掲載資料【17】（勝田守一「教育学とは何か」）について

「考察ノート⑦～継続研究 (13) における～」では、勝田守一著『教育学入門Ⅰ』（1964年）と『入門Ⅱ』（1968年）とを、その相関において理解することを試みた。その私の論述では、「哲学の素養をもつ勝田は、（イェーガーの）「文献学的方法」の重要性を深く受け止めながら、独自の探究として、教育学を原理的、体系的に考察することを試みている。」と記し、文中に「独自の探究として」と書き入れた。つまり、イェーガー著と勝田自身の自主的な探究の精神との呼応の關係に注目しようとした。このことをより具体的に考えるために、『教育学入門Ⅰ』『Ⅱ』を構想していく過程を推量させるものとして、「教育学とは何か」（1960年頃の「未発表原稿未完」、『教育と教育学』岩波書店、1970年、所収）——以下「草稿」と表記する——に光を当てる。

ア) アリストテレスの「技術」の思想との対話

勝田は、この草稿では、ギリシア思想、就中アリストテレスの「技術」の思想との対話をベースに考察を展開している。勝田は論の始まりで、「…教育に関する学的反省意識は、ずいぶん古くから存在してきた。ここでそれをくりかえしてみる必要はないが、人類が人間とはなにかと問いはじめたのと時を同じうして、どのように人間を育てるのかという問いは必然的に出現する。人間がなんであるかを問うのは、人間がどうならなくてはならぬか、どのようにすれば人間はならなくてはならぬものになるのかと問うことを自己のうちに含んでいる。」と述べ、「ペダゴギー」についての次の説明から論を進めていく。

教育学は、伝統的にみれば、ペダゴジーということばの系譜を引いている。教育学ということばはペダゴジーの訳語として用いられてきたのである。ところが、このペダゴジーというヨーロッパ語は、周知のように、ギリシア語の子どもを導くもの（パイダゴース）から出ていて、その技術、つまり子どもを教育する技術、仕方についての知識を意味するといっておく。

人間グシケの心アレテが真実をとらえる仕方には、技術・学知・実践知（思慮）・哲学知・メーヌス理性の五つがある。ここで問題になるのは技術と学知（科学知）との区別である。ところでこの五つを、さらに大きくくくると、二種類になる。一つは「もっと違った仕方でもあることができるもの」、もう一つは、「もっと違った仕方ではあることができないもの」に分れる。こういう表現の仕方には注釈がある。技術と科学知の相違を代表的なものとして、この区別を考えて差しつかえないようである。そこで、技術が、「もっと違った仕方でもあることができる」というのは、どういうことなのだろう。

このように、「技術」の検討を重ね、「人間が人間をつくる技術をペダゴジーとよぶとすると、ここには重大な問題がある。」と論を進め、次のように説明する。

したがって、人間をつくる技術をペダゴジーというばあいには、つくるというのはたつきがかかわるのは人間そのものではなく、人間の所有するある側面である。人間の存在そのものは「必然的に存在した生ずる」のであって、それは教育にはかわらない。しかし、ある人間がある性格あるいは能力を所有したり、あるいは一定の知識を覚えたりするのは、教育にかかわる。しかし教育がかかわる人間は、自己の学習という主体的行為なしには、変化しないという特性をもっている。このことは、いま教育は、人間の所有する能力、あるいは性格、習慣、思想をつくるはたつきであり、ペダゴジーはその仕方についての知識（エピステーメ）だとしても、他のものをつくる技術と基本的に異なる性格をもつということを示している。

イ)「社会学（あるいは社会科学）的研究方法」による「教育科学」に対する批判

勝田は、上述のように「人間が人間をつくる技術」の「技術の性格」に留意しつつ、デュルケムの、「ペダゴジー」とは区別される客観的・実証的な「教育についての科学」「教育の科学（正確に言えば教育の社会学）」の検討を進めていく。イエーガーが、「冷静 dispassionate」で「客観的 objective」（wertfreie 価値的）な「現代の学問」（「最近の歴史的な思考」）と対決しようとしたのに対し（「序論 教育史におけるギリシア人の位置」の訳と検討「12. 危機の時代における古代学の課題」, 本継続研究（2）p.26～27.）、勝田は、教育研究の歴史的試練の局面として、デュルケムの理論を検討しつつ、「社会学（あるいは社会科学）的研究方法」による「教育科学」を批判的に吟味し、次のように述べている（ここでは、アリストテレースに拠りながらも、独自の考察に入っているように見える）。

しかし、教育が他の技術と異なるところもまた重要である。アリストテレスは、技術は、「人間からはじまる」といっているが、ペダゴギーは、人間が人間にかわりながら、人間についてなにかをつくり出すはたらきかけの知である。人間は、自己についてのなにかをつくり出すのには、外からのはたらきかけを必要とするが、同時にそれは自己が主体的に学習するという行為を媒介にする。このような関係の中では、ペダゴギーにとっては、目的は、単に与えられているだけではなく、はたらきかけるものと、はたらきかけられながら、学習するものとの相互の間でつねに探究される。これが基本的に他の技術と異なる点である。

ウ)「教育学を建設する仕事」に自ら立ち向かおうとする意思

上記引用文のあとに、【資料-17】の文章が続く。そこでは勝田は「教育学は、このような意味で、現在はまだ断片としてしか成り立っていない。このことを認識するのは勇气のいることである。あらゆる人間の科学の発展に即して、これを人間形成という人間的行為の技術を中核として構造化する努力が教育学を建設する仕事なのである。」と述べ、さらに「しかし、同時に教育学はまさに存在している。それは、いわば可能性として、いいうるならば、可能的・学的意識として、現に営まれている知的・実践的作業を、教育学的として意味づけている。」と続けている。

改めて勝田の『教育学入門Ⅰ』『教育学入門Ⅱ』の結実に目を向けると、この「教育学を建設する仕事」に自ら立ち向かおうとする勝田の意思とその基本構想が伝わってくる。

エ) 勝田の自主的な探究の精神と古典との対話

勝田はどんな考察においても、そしてこの「草稿」においても、世界史における古典との主体的な対話を、(直接的に明示してはいなくても)省くことはしない、あるいは、「人間」と「教養・教育」を考察するときの習慣としているといつてよい。そして勝田は古典と対話していく訓練を、「考察ノート⑦～継続研究(13)における～」(論文p.21)で見たように、生涯続けたようである。勝田の「日記抄」が公のものとなっているが⁽¹⁾、その中の旅立つ年(1969年)の6月7日には、入院以来の読書リストが書かれていて、その一つに「勉強の本」として「ラテン語文典」「ギリシヤ・ラテン語引用語辞典」が記されている。以下、その「日記抄」より、小論の趣旨に沿った抜粋を試みる。

6月8日：ラテン語の練習文を訳す。アガラティフの使い方を少々解決する。

6月12日：ヘクスターの「ルネッサンスの教育」、フランスの「イスパニアにおけるイスラム文化」を注文。

7月9日：岩波の堀江氏に魏志倭人伝他一冊、タキトゥス「ゲルマニア」を依頼、寄贈される。面白そうである。礼状を出す。日本心性論、道徳論の資料としたい。

7月10日：義弟山田潤二、ヨーロッパ旅行に行くということで来院、ヘロドトスについてきくが、要領を得ずじまい。…寝ながらタキトゥスを読む、ほんとうに面白い。中国人とローマ人の周辺民族を見る態度に差があって面

白いのかもしれない。もちろん魏志は正史、「ゲルマニア」は個人的著作だという差もあろう。

7月11日:「ゲルマニア」を読みつつける、面白し。

7月12日:「ゲルマニア」を読み終る。世界史講座の中世Ⅰを読みはじめる。

7月13日:読書は岩波世界史講座中世Ⅰ、どうもどれも感心しない。自然、マテリア、身体について想いを深めたい。

7月14日:カテドラル・ド・シャルトル、「その仕事は中世的宗教的アンスピラシオンと技術の蓄積による」サリュベール^{アール}の役割。中世Ⅰ読む、手工業ギルドの他に対する競争、しかし個人の創造的自由はないということ。大学と国家の問題は単純ではない。古典近代の理念との関係は如何。

7月15日:Deppeler;Staat und Universität を読む。

(以降は、奥様による代筆となっている。7月30日に他界。)

なお勝田の古典の読み方であるが、例えば論考「イエーガーの『パイディア』」⁽²⁾の注記の(2)に、「英訳の『労働と日々』の中で召使いのことを slave と訳している(ロエブの古典文庫版)のは、正確かどうか、研究しなくてはならない。」と記しているように、非常に鋭く注意深い。勝田は古典をとおり、そのもつ思想を、単に「理論」的文言においてだけではなく、その時代の社会の実相との関連において歴史的に正確に掴もうとしている。

勝田の諸論考には、問題に対する態度の選択の自省と、(主観に逃げない)自主的な探究精神とが染み渡っており、そしてそれが「勝田教育学」の根本的な性質となっているのであるが、その自主的な探究精神には、古典を読むためゆめぬ訓練が伴っている。そこでは「人文学(人文科学)」が比類のない役割を發揮している。⁽³⁾

オ) イェーガーは『パイディア』をプラトーンの叙述で完結させている

イェーガーは、『パイディア』の構成におけるアリストテレスの位置の理解について、次のような内容の説明をしている(本継続研究(3):Ⅲ. 全体の考察 3. 古代ギリシアの「パイディア」とアリストテレスの位置、論文 p.131)。

イェーガーは、プラトーンについては、「彼はギリシア的教養(paideia)の歴史とされるもの全ての頂点であるに違いない」と述べ、アリストテレスについては、「知る人ぞ知る大家であるアリストテレスと共にパイディアの概念はその熱烈さの著しい低下を経験する」と評しており、さらにアリストテレスはヘレニズムの初頭に位置づくものとし、「教養(culture)と科学(science)との関連に関わる諸問題は、それはヘレニズムのアレクサンドリアの特質であるが、アリストテレスの学校において初めて明瞭に現れる。」と述べている(<訳文④>)。「ギリシア的パイディア」の形成を問う『パイディア』は、このような意味でプラトーンの叙述で完結するものとなっている。

勝田はアリストテレスとの対話を多く試みているが、勝田の教育学研究とイェーガーのパイディア研究との関連については、本継続研究の研究テーマの一つとして意識しておきたい。

2) 掲載資料【18～19】について

勝田が残した探究世界は大きなものであるが、堀尾輝久は、勝田の仕事を自ら引き継ぐ思いをもって、その像を簡潔に次のように表現している（『人間の科学としての教育学 勝田守一著作集 6』（国土社、1973年）の「解説」）。

勝田教育学の輪郭をたどるとき、それを引き継ぐ者には、エンサイクロペディストの資質が要求されているのだなあと思わせられる。しかも、単なる博学にとどまることは許されない。教育実践ときり結ぶ地点で、おのれの生き方を見定め、新しい世代の形成への参与とその責任を引き受ける主体的な価値選択がもとめられる。そのうえ、厳密な実証と科学によって、その選択の確かさをゆるぎないものにしなければならないと考えると、気の遠くなる思いにかられる。…

「勝田教育学」は、このような感慨を抱かせる広さ、深さをもっているが、その本質に接近していくために、大田堯⁽⁴⁾——勝田の論集、著作集を編む統括者であった——による「勝田教育学」の評を参考にしてみよう。【資料-18】は、大田による「あとがき」（抜萃）（勝田守一『教育と教育学』岩波書店、1970年）であり、【資料-19】は、大田による「発刊にあたって」（抜萃）（勝田守一著作集（国土社）「月報Ⅰ」1972年6月）である。これは「月報」という誌面ではあるが、「勝田守一著作集刊行委員会を代表して」という立場で述べられている。

この二つで、第1に目を向けておきたいことは、大田が「とりわけ著者は、それぞれの状況の進展の中で、知識人としての自分の役割を、きびしい眼で吟味しつづけている。」と述べ、「同じ知識人の同僚として、また学問研究という知的作業を、すべての人びとの幸福の増進に橋渡しする任務をもつものとして、学校教師に対する著者の親愛感と期待とは、格別であった。」（【資料-18】）と記していることである。大田はこれらの文章を、「勝田教育学」の本質にかかわるものとして叙述しているが、このような指摘からも、勝田の古典に向かう「決意」というべきものが推量されてくるのである。とくに大田の「学校教師に対する著者の親愛感と期待」という評は、勝田が「ペダゴギーにとっては、目的は、単に与えられているだけではなく、はたらきかけるものと、はたらきかけられながら、学習するものとの相互の間でつねに探究される。」⁽⁵⁾と述べているように、勝田のペダゴギー本質認識そのものと結んで理解されるべきものである。勝田は、教育の本性、本質から教師の教育の自由の必然、必要を確信し、教師との共同の教育の探究に「期待」しているのである。

第2に目を向けておきたいことは、大田が「勝田の明確な認識の結果や提言に学ぶ以上に、その発想の根源にある勝田自身の内面史の中での危機、苦悶こそ、わたくしたちにより深く訴えてくるはずのものであるからだ。」（【資料-19】）と述べていることがらである。この指摘も、勝田が「政治」と「教育」との関係として、繰り返し、何層にもわたって考察し続けていることと結んで理解されるべきだろう（「考察ノート⑦～継続研究（13）における～」を参照のこと）。勝田の内部にある、戦前・戦後を連続する「問題」としての思いと、勝田の教育本質探究とは響き合っているのである。そうしてこういうところからも、勝田の古典に向かう姿勢の、その真剣さが感じられてくるのである。

【資料-17】

勝田守一「教育学とは何か」(未完の未発表原稿で1960年頃のものとする、『教育と教育学』岩波書店、1970年、所収、『勝田守一著作集6』国土社、1973年、収録)より、その末尾を掲載する。

家を建てる技術知は、建てられる家という目的はすでに定められている。建築術はその目的を実現するために、資材にはたらきかえることについて熟慮し、技能について認識することにおいて成立する。しかし、ペダゴギーのばあいには、はたらきかけられる資材(教育を受けるもの)そのものが、自ら、変化する運動の目的を意識しなければならないし、はたらきかけるものは、それを意識させるように導かねばならない。はたらきかける人間がいただく目的は、いわば、はたらきかける人間と自分とをともにつつむ歴史的社会的の絶えず動的に発展する現実の動向に即して、探究されるものなのである。

このように教育学は、まさに技術知である。それは、基本的に人間が人間を育てるというはたらきに即した技術的認識を中核とする。したがって、教育学は、人間の成長、発達、社会的形成についての科学によって明らかにされた法則性の認識を含みながら、人間と人間との、相互のはたらきかけの中で、教育を受けるものに、習慣・能力・知識・理想が変様し、形成される過程についての技術知として成立する。

教育学は、このような意味で、現在はまだ断片としてしか成り立っていない。このことを認識するのは勇気のいることである。あらゆる人間の科学の発展に即して、これを人間形成という人間的行為の技術の中核として構造化する努力が教育学を建設する仕事なのである。現在では、教育学は、問題領域に分れて、断片として多くの試みの途上にある。それらは統一的に構造化するという方向で、協力を要求されている。しかし、そのほかに、教育学というものが、すでに建築されて存在すると考えるのは幻想にすぎない。その現実を承認するのは、教育学の研究を断念することとは同じではない。

しかし、同時に教育学はまさに存在している。それは、いわば可能性として、いいうるならば、可能的・学的意識として、現に営まれている知的・実践的作業を、教育学的として意味づけている。私たちは、可能性によって意味を与えられながら、それを現実化する作業を教育学的研究と名づけることができるだろう。

【資料-18】

大田堯「あとがき」(抜萃)(勝田守一『教育と教育学』岩波書店、1970年)

長短の論稿24編、670頁に及ぶこれらの文章は、それぞれちがった時期に、従ってまた異なった状況の中で執筆されたものであり、著者が対象として頭に描いた読者もまた、多少とも異なってもいよう。けれども、その一つひとつはすべて、そのわずかな違いにも対応しながら、絶えず教育の本質を根底から改めて問い直しつつけることにさしむけられており、そのことを通じて、自らを含めて、現代における人間の存在を、教育と発達の相から探求しつつづけているのである。

自らを含めてと、あえて書いたのは、これらの論稿が、学問上の研究論文として、

あくまでも客観的に、対象に対して厳密な分析をくわえているというだけではなく、まさにそのことを通じて、逆に自らの所在をますます深いところで明らかなものとしていくことをめざして、対象とその追究方法そのものが、主体的に選択されているということなのである。とりわけ著者は、それぞれの状況の進展の中で、知識人としての自分の役割を、きびしい眼で吟味しつづけている。

同じ知識人の同僚として、また学問研究という知的作業を、すべての人びとの幸福の増進に橋渡しする任務をもつものとして、学校教師に対する著者の親愛感と期待とは、格別であった。そのことは、この本全体を通じて、たとえば、大学や学問を論ずる部分でも、いつもにじみ出てきているものなのであるが、とくに「学校とは何か」の未発表論稿は、そうした同僚知識人としての教師のために捧げられているのである。…

【資料-19】

大田堯「発刊にあたって」(抜萃)(勝田守一著作集(国土社)「月報Ⅰ」1972年6月)

各巻の責任編集者が当面してきた問題、困難については、それぞれの巻末にえられる解説で推測していただくほかはない。ただ編集全体にもかかわる一つの問題は、戦前における勝田の著作および講義ノートなどのあつかいについてである。戦前の勝田は、1942(昭17)年文部省に入るまで、若き哲学の研究者であり、教師であった。その思想は、すでにこの頃から一貫して深いヒューマニズムに支えられており、しかも、そこには後年の勝田の教育研究につながる人間とその形成の機微への深い関心があったが、それへの接近方法や表現の中には当時の社会状況の圧倒的な力のもとでの余儀ない屈曲のかげも含まれてくる。戦後の勝田は、このわずかな自らのひずみに対しても、仮借することのないきびしさでのぞんだのであっただけに、この期の述作をそのまま世に問うことについて、わたくしたちの間にいくらかのためらいがあったことは当然である。けれども議論を重ねる中で、たとえば、勝田にとって、しぶい思いのひずみであっても、わたくしたちはこれをあえて隠蔽する必要はないし、そうあってはならないという考えでほぼ一致しているつもりである。勝田の明確な認識の結果や提言に学ぶ以上に、その発想の根源にある勝田自身の内面史の中での危機、苦悶こそ、わたくしたちにより深く訴えてくるはずのものであるからだ。わたくしたちは、師として、仲間としての勝田をいたずらに追憶したり、弁護したりするために、この著作集を世に送るのでは決してない。問題にみちみちたこの現実とわたくしたちの格闘に、亡き勝田にも加わってもらわねばならぬし、それに値するものであることをわたくしたちは確信するからこそ、これを世に問うのである。…

<注記と考察>

- (1)『想偲春——勝田先生追悼集——』1971年、「勝田先生を偲ぶ会」による私家版、所収。
なお小論で「日記抄」を引くことについては、読者からの指摘にヒントを得た。
- (2) 論考「イエーガーの《パイディア》」については、「考察ノート⑦～継続研究(13)における～」の【資料-13】を参照のこと。

- (3) 勝田の研究姿勢と資質に触れながら改めて思うことであるが、大学教師には、考えようとする若い精神に(学生たちに)ふさわしいタイミングで古典の案内ができることが、したがって大学教師には、それぞれに、自然科学、社会科学、人文学の学問領域を超え、‘自分の古典リスト’を形成していくことが求められているのではないか。
- (4) 大田堯：1918年～2018年。
- (5) 小論の「考察ノート⑧」のイ) で引いている勝田の「草稿」。

Received : May, 7, 2019

Accepted : June, 12, 2019